



転校生狩り



竹出鬩道

囁く声「また転校だって」

応じる声「……ふーん」

問う声「驚かないんだ？」

諦める声「だって、もう慣れちゃったもん。いつも、だいたい、あっとゆー間。
あぁ、この学校では、そーゆーもんなんだ～、って思うしかないわ」

懐かしむ声「悪いヤツじゃなかったけどな……」

混ぜっ返す声「いや、そんなに、どんなヤツだったか、みんな、知らないって」

悲しむ声「せめて、さよならが言いたかったよ」

憤る声「でも、さよならしたい人に限って、さよならできなかったし……、ね……」

すっとぼける声「それって、誰のこと？」

ほくそ笑む声「誰って、誰さー」

盛り上がる声「誰、誰!？」

薄暗い教室の片隅で、たむろう生徒たちから、くすくすと忍び笑いが響く。

男子M「転校生狩りだ……」

女子A「転校生狩り～……」

男子T「転校生狩りか……」

女子B「転校生狩りね……」

男子U「転校生狩りさ……」

女子C「転校生狩りよ……」

生徒たち「「転校生狩り……」」

×

×

×

教師「えー、わかっちゃいると思うが、うちのクラスに、また転校生だ」

朝のホームルームが始まる前、教室に現れた教師の後ろから、見ず知らずの生徒が入ってくる。このパターン、学校ではよくあるお約束のシーンで、おおよそ想像が付いた。

転校生「烏丸渉《からすま わたる》です。よろしくお願いします」

黒板に自分の名前を書き終わると、振り返って一礼する。

教師「……………。自己紹介は？」

烏丸「特にありません」

教師「そうか、まあ、それは、おいおい……」

毅然とした態度に気圧された担任の教師は、一人の生徒に全てを委ねることした。

教師「えー、何かあれば、学級委員の譲葉《ゆずりは》に訊くように」

譲葉「はい」

いかにも委員長っぽい真面目そうなメガネの男子生徒が、姿勢よく手を上げている。

教師「それから、えー、確か席は、葛巻《くずまき》の隣が空いているんだっとな」

教室を見渡せば、窓側、やや後方、一番のポジションの席が空いている。隣りは、葛巻「……………」

ポロポロの学生服を着た男子生徒が机に突っ伏して、顔を隠して眠っている。

譲葉「はい、ここです」

学級委員の譲葉玲人《ゆずりは れいじ》が、誰もいない自分の前の席を指し示した。

譲葉「困ったこと、わからないことがあれば、何でも訊いてくれ」

烏丸「よろしくお願いします」

フランクな笑顔に、烏丸《からすま》は頭を下げ、しかし視線を逸らさず、生真面目に対応する。

教師「えー、それじゃあ、みんな、仲良くするように」

気の弱そうな担任は、悲しげな表情でポツリと付けたす。

教師「……短い付き合いになるかもしれませんが」

一時限目 。

休み時間 。

二時限目 。

休み時間 。

三時限目 。

休み時間 。

四時限目 。

そして、昼休み 。

讓葉「昼だぞー、メシー」

葛巻「……………」

讓葉は午前中、ずっと眠りこけていた葛巻大地《くずまき だいち》の肩を揺する。

讓葉「烏丸さんは、どうします？」

烏丸「俺？」

讓葉「弁当を持ってきてるならいいですけど、購買部の方でパンとか、オニギリとか、

お茶とかジュースを売ってるから、買いに行くなら、いっしょにどうですか？」

四時限目が終わった直後、チャイムが鳴り響く中、教師を押しのける勢いで我先にと多くの男子生徒たちが教室から飛び出ていった。給食かつ学食のない多くの高校がそうであるように、購買部では数少ない人気惣菜パンの争奪戦が繰り広げられているのだろう。

讓葉「案内しますよ」

烏丸「わかった」

実のところ、烏丸にとって真っ当な学校生活は久しぶりで、午前中の授業内容はチンプンカンプン。じっとしているのも、もう限界だった。立ち上がり、首や肩をほぐす。

讓葉「葛巻は、どうする？」

葛巻「……………」

俯いた頭を上げることなく、葛巻は右手を振って、断りの合図。まだ寝るつもりだ。

讓葉「じゃ、行きますか」

二人は連れ添い、階段を降り、一階へ。渡り廊下を通り抜け、生徒であふれる購買部へと向かった。入り口の段階で満杯である。自動販売機付近も喧騒、ごった返していた。

讓葉「残り物でよければ、そんなに急ぐ必要もありませんが、

そもそも僕は混んでいるところに飛びこむのは苦手ですてね……」

先陣たる第一陣は早々に立ち去っているものの、授業の長引いたクラスの男子、多くの女子生徒が後続となり、入れ替わり、必死に押し合いながら目当ての買い物をしている。

烏丸「どこの学校でも、昼時は、こんな感じだったよ」

讓葉「どこの？」

烏丸「いや、前の」

讓葉「前の、ね……」

生徒たち「「あっ!!」」

男子生徒「「讓葉さんだ」」

女子生徒「「讓葉さんよ」」

生徒たち「「 てことは」」

男子生徒「「あいつが転校生か」」

女子生徒「「あの方が転校生……」」

突然、二人の目の前、たむろう群集が割れて、モーゼのごとく歩む道が開いていく。

烏丸「……やけに注目を浴びてるな、俺たち」

譲葉「困ったもんだ」

譲葉は眉を顰めているが、一方で困り顔も、どこことなく嬉しそうな烏丸である。

烏丸「懐かしいなあー」

コッペパンを手に取り、他に残り物の中から適当に昼食のパンをいくつか見繕った。

譲葉「それじゃ、教室に戻りますか？」

烏丸「いや、できれば、なるだけ静かなところで食べたいな」

ざわめきから一転、今の購買部は静寂に包まれているものの、しかし転校生ゆえに注目されていることは明白だった。自意識過剰ではなく、どこにいても視線を感じる。烏丸が振り向くと目を逸らすのであるが。友達同士の会話はヒソヒソ話で本当に聴こえない。

烏丸「もちろん、教室だって、かなり静かなところだったけど、そうじゃなくって」

譲葉「ははは、そうだね、そうですね、全く、その通り、あれは居心地悪いよ」

ああもクラスメイトに遠巻きにされていては、転校生の側から歩み寄るしかなくなる。

譲葉「だいたい今頃、教室じゃ、烏丸さんのことで盛り上がってるかもしれないし」

烏丸「想像もつかんな……」

クラスメイト「「……………」」

烏丸「……やれやれ」

教室の空気を思い起こす烏丸の同意を求める視線に対して、首を竦めて譲葉が応じた。

譲葉「いつもは、あそこまでおとなしくないから。わかってるとは思うけれど……」

烏丸「みんな、人見知りしてるのか？ だったら、信じられんくらいにシャイだな。

こーゆーときは、転校生を取り囲んで、もっと根掘り葉掘り訊くもんだろう」

譲葉「興味が無いわけじゃないと思うけど、少し緊張してるのかな？ お互い」

二人がゆっくりと歩く、その向かう先で静まり返る生徒たちが廊下の端に寄っていく。

烏丸「そうか？」

烏丸からすれば、新たな転校生に対し、どう接していいものか、判断を迷っているように見える。クラス全体の方針として。あるいは学校全体？ 歓迎されていない雰囲気。

譲葉「少なくとも、烏丸さんのオーラに押されてるよ」

烏丸「……………」

こちらを窺う上級生に、烏丸はギロリと鋭い視線をぶつける。一瞬で決着が付いた。

譲葉「身体を鍛えていることは一目瞭然。おそらく何かしらの武道でしょうね。

皆、底知れないものを感じている。不気味なところがあると言ってもいい」

烏丸「そうかな？」

笑顔を浮かべるが、不敵。一般生徒には、恐怖。ぞくりと背中がそそけ立つ。

譲葉「失礼ですが、同級生に見えませんかよ」

讓葉が想像するに。烏丸のワイルドな風貌、ホリの深いしっかりした顔付き、日に焼けた肌の傷痕、くすみ、制服の下に隠されたはちきれんばかりの筋肉、そもそものガタイの大きさが半端ない。少し老けている上に、いかんともしがたい貫禄を持ち合わせている。

烏丸「ちょっとワケアリなんだ」

讓葉「……でしょうね」

二人は、ゆっくりと階段を登っていく。

ゆっくりと時間をかけて……。

× × ×

五時限目 。

休み時間 。

六時限目 。

そして、放課後 。

烏丸「んあああああ」

欠伸が出てしまうのも仕方ない。一応、つつがなく一日目の授業を聞き流してみたものの、どの教科も全く、わからなかった。その点は、最初から諦めていた。椅子に座って、勉強するなんてこと自体が久方ぶりで、眠気が襲ってこなかっただけでも良しとしよう。

烏丸「あああー……」

でも、大きな欠伸は出る。すでにクラスメイトの多くは、そそくさと帰り支度を整え、帰宅ないし部活へ向かっていった。教室に残っている生徒は、ほんのわずかだった。

讓葉「どこか見たいところとかあれば、これから案内するけど？」

烏丸「いや、別にいい」

讓葉からの申し出を断り、烏丸は一人、勝手気ままに校内をうろつく 。

中庭 。

渡り廊下 。

図書館 。

体育館 。

下足場 。

正門 。

職員駐車場 。

体育館裏 。

弓道場 。

テニスコート 。

自転車置き場 。

グラウンド 。

不意に振り返った烏丸は、全ての窓にM字の太く、しっかりした筋交いが入り、後から耐震補強された校舎を物珍しそうに見上げる。見上げて、さらに視線を上へ 。

烏丸「……ん？」

一瞬、屋上に誰かがいたような気がしたが、見間違いだったか、もう姿は見えない。

二日目 。

登校 。

一時限目 。

二時限目 。

三時限目 。

四時限目は、体育の時間 。

譲葉「烏丸さん！」

烏丸「うっ、りゃーっ!!」

男子生徒は体育館でバレーボール。試合形式で、前衛の烏丸が譲葉のトスに合わせて、ジャンプ。空中でのタイミングが少しずれているものの、力任せにスパイクを放つ。

松田・竹田「「させるかーっ!!」」

ボールは相手のブロック二人の手を弾き飛ばして、コートに突き刺さった。

梅田「うわぁー……」

あまりの鋭さにレシーバーは及び腰で反応できず、へたりこむ。

讓葉「ナイス・アタック！」

烏丸「どーもどーも」

チームメイトとハイタッチしていく。烏丸の顔に怖いながらも笑みがこぼれる。

昼休み 。

讓葉「いただきます」

烏丸「……………」

昨日と同じように、買ってきたパンを教室で食べる。二日目のお昼である。昨日よりは幾分、転校生烏丸を取り巻く空気が和らいできたように思える。とは言え、讓葉を除き、烏丸に話しかけるチャレンジャーな生徒はいない。かなり、おかしい状況ではあった。

烏丸（今度こそ、うまくやっていきたいと、いつも思っているんだか……）

いかんともしがたく。しかし、まっ、まだ二日目。これから取り戻せるはずだ。

五時限目 。

六時限目 。

そして、放課後 。

教室で二人 。

部活の喧騒を聞きながら 。

讓葉「天気も良さそうですし、明日にでも……。」

今と同じ時間、もう少し、後々の方がいいかな？」

教室の壁時計を目にしながら、讓葉は烏丸に囁く。

讓葉「屋上へ来てください」

烏丸「……屋上？」

烏丸「屋上か……」

烏丸は後ろを振り返り、校舎の屋上を気にしつつ、正門から下校する 。

三日目 。

放課後 。

夕暮れの校舎　　。

薄暗い階段　　。

烏丸「……………」

烏丸は一人、屋上へとつながっている階段を登っていく。

屋上へ出る鉄扉に書かれている警告文『関係者以外立入禁止』　　。

ガチャリ。ノブを回す。押せばいいのか、引けばいいのか、ガチャガチャしてしまう。

烏丸「……む」

扉の向こう側を見やっ、烏丸は手をかざし、目を細めた。夕日が差し込んでくる。

逆光の屋上に立つ人影　　。

二人　　。

譲葉「お待ちしてました、烏丸渉さん」

一人は譲葉である。そして、もう一人　　。

×　　×　　×

小・中学生の頃と言え、出会いと別れの繰り返しが思い出。烏丸は、どこか一箇所で定住することをよしとしない親の都合で全国各地を引越しばかりしていたため、否応なく転校しまくってきた。振り返ってみれば、同じ学校に一年と通い続けた経験すらない。

変な時期に転入してきたと思えば、一ヶ月程度で突然、転校することも、しばしば。新しいクラスメイトと、さほど仲良くなれるはずもなく、お別れ会も思い入れのなさ、甚だしくまもらない。ほんの一時、机を並べただけの同級生では記憶に残らないだろう。

逆に比較的、長期間、通った学校では誰しものが眉を顰める嫌な思い出でしか、その名は語られないはずだ。平和な教室に波乱を持ちこむ厄介な転校生だったと言う自覚はある。

先生「今日から、皆さんといっしょに勉強する新しいお友達を紹介します」

ざわざわ……、ざわざわ……。

先生「烏丸渉くんです。みんな、仲良くしてあげてくださいねー」

烏丸は転校生は転校生でも、転校生の達人であり、筋金入りのエキスパートだった。

普通なら転校初日、誰だって新しい学校、初めての出会いにうまくやっていけるかと不安を抱え、緊張するもんだ。もちろん、迎える方は迎える方で、ドキドキしている。勝手に期待値を高めて、転校生の登場を待ち構えている。まず男か女かで盛り上がり、美形なのか、頭がいいのか、面白いヤツなのか、どこからやってきたのか、などなど……。

烏丸「烏丸渉です。よろしくお願いします」

ぱちぱちぱち、ぱちぱちぱちぱち！

休み時間になると皆に取り囲まれ、烏丸は無事、華々しい転校生デビューを果たした。周りにいる誰もが、昔の自分を全く知らない。楽しいスクールデイズを過ごすために、どうすればいいのか？自分を偽り、隠したところで、すぐバレる。結局、うまくいかなくなることが多いので、素の自分を早く知ってもらうよう、正直に向き合うパターンが最良だと思う。当然、若干の上乗せトーク、武勇伝を盛るのはサービス精神の範疇であろう。

女子生徒「烏丸くんって、前の学校でも人気者だったんでしょ〜？」

烏丸「ははは、全然そんなことないから。ないない。困ったなあー」

一方、転校生はキャラクターが被っているクラスメイトにとってライバル登場である。総じてクラスの多数派は優しく歓迎してくれるものだが、チャホヤされているのを面白く思わない輩もいるわけで、教室の片隅から浴びせかけられる厳しい視線に敵意を感じていた。子供とは言え、人が社会で生きる限り、競争を避けては通れない。一番、カッコイイのは、頭がいいのは、面白いのは、誰だ、誰だ、誰だ？ ケンカが強いヤツは誰だーっ!?

男子生徒「|カ《\》ラ《\》ス《\》マ《\》ル《\》くんってさー」

烏丸「カラスマですけど」

男子生徒「そうそう、|カ《\》ラ《\》ス《\》マ《\》ル《\》くん」

烏丸「……………」

なんだかんだで一週間としないうちに、転校生ブームは終わる。新しい学校での新たな友達作り、そこそこ頑張ったつもりだが、最初は根掘り葉掘り質問攻めで会話するネタに困らないものの、その後は共通の話題がなく、何だかなー、うまく溶けこむには至らず。ある程度のガッカリ感は仕方ない。二割増し、三割増しで評価されるのは最初だけだ。

先生「次、烏丸ー」

烏丸「わかりません……」

授業中、指名され、問題に答えられず、しどろもどろ。バカだとバレる。そもそも教科書が違う、進行度が違う。転校を繰り返してきた烏丸は、どうしたって勉強じゃ落ちこぼれになってしまう。ヒーローになるためには、スポーツの分野で頑張るしかなかった。

勉強はできないが、運動神経のいい転校生のポジションを守るため、体育は人一倍、真面目に取り組んだ。誘われれば、さして経験はなくとも、喜んでクラブ活動に参加した。すごい転校生が助っ人として現れた！ と一瞬、期待されるが、実力はなかった。学校によって、全然レベル違うし。前の学校ではレギュラーでも、今の学校じゃ補欠である。

不良生徒「おい、転校生。最近、調子乗ってるらしいなー？」

烏丸「……いえ、そんなことは」

不良生徒「前の学校ではどうだったか知らんが、こっちのルールは守ってくれんと」

烏丸「どんなルールですか？」

不良生徒「ええかっこしいが許されるほど、世の中、甘くねえんだよ……」

ケンカを売られた場合、自分が新たな標的、いじめられる対象に選ばれないためにも、最初は、より強気で反発しておかないといけない。見様見真似の構え。何かしらの武道を嗜んでいるかのように思われているが、ハッキリ半分、根底にあるのは、ただのケンカ殺法、つまり我流だ。殴られたら、殴り返す。容赦しない。手加減して、いいことはない。

烏丸「おはよう」

クラスメイト「「……………」」

翌日には早くも噂となっていて、烏丸を出迎える教室の雰囲気が一変していた。

男子生徒「昨日のタイマン、見た？ 見てない？」

女子生徒「すごかったらしいね」

男子生徒「ボッコボコ。一方的。烏丸くん、強い強い」

女子生徒「マジでー？ 烏丸くんって、やっぱ怖い人だったんだー」

男子生徒「こんな時期に転校してくるなんて、おかしいと思ってたんだ」

女子生徒「前の学校でも問題、起こして追いだされたんだよー。チョーありえーる」

烏丸「……………」

直接、話しかけてくれれば反論することもできたが、そうはさせてくれなかった。それなりに仲良かったクラスメイトの数人は、あからさまに逃げていく。孤立してしまった。

不良生徒「あ、あいつです！」

不良先輩「昨日は、世話になったそうやのうー、転校生」

クラスメイト「「……………」」

白い目。怯えた目。いや、もう誰とも目を合わしてもらえない。状況は悪化する。

烏丸「ここでは、ちょっと……」

不良先輩「おう、ついてこいや」

体育館裏で、二人まとめて半殺しにしてやった。二度と逆らおうとは考えないように。

不良生徒「烏丸ー！ 出てこいやー、烏丸ー！」

不良先輩「落とし前ってえー、言葉ー、知っとるじゃろ、わーれー！」

烏丸「しつこいなあー……」

不良先輩「この前は油断しとっただけじゃ！ ハラの調子も悪かったしのー」

不良生徒「そうやそうや、先輩が本気出せば、あんなもんじゃないからなー」

烏丸「……」

不良先輩「それに、今日は、マジで超すごいお人を呼んでるんだぜ」

不良生徒「ひゃーはははっ、終わったぜ、烏丸ー！」

不良生徒・不良先輩「アニキー、ア～ニキーッ!!」

不良兄貴「お前か、わしの子分を可愛がってくれたそうやないかー……」

烏丸「どりゃーっ！」

不良兄貴「ぎえーっ!!」

皆の見ている前で瞬殺してしまう。こうして、また、ろくでもない武勇伝が生まれた。

真面目生徒「ごめんなさい。烏丸くん、僕なんかのために……」

烏丸「別にお前を助けようとしたわけじゃない。ムカついたから、俺の勝手だ」

女子生徒「実は、烏丸くんは悪くないそうよ」

男子生徒「そうだったのか……」

ことなかれ主義で、ずっと傍観していたクラスメイトたちの間で動揺が走る。

男子生徒「でも、面倒なことになったな」

女子生徒「もしかして、うちのクラス全員が標的にされることってないわよね？」

真面目生徒「とぼっちは全部、僕のところに来るんだ。もうやめてよ、烏丸くん」

烏丸「関係ねえつってんだろ!? 俺の邪魔をするな、どっか行け、しっしっ！」

真面目生徒「そ、そんなあー……」

烏丸「かかってこいやーっ!!」

ドガッ、バキッ！ ズゴッ、メリッ！

男子生徒「烏丸くん、また暴れてるよ……」

女子生徒「落ち着いて勉強できないって、こんな毎日……」

真面目生徒「ぼ、僕は助けてくれたなんて、頼んだことなかったんだ。な、なのに」

烏丸「……」

真面目生徒「烏丸くんが、か、烏丸くんが悪いんだから！ ……し、死ねえええーっ!!」

恐怖に震え、鼻水まみれで大泣きながら、果物ナイフを突きだす。みんなから追いつめられた結果、この苦しみから逃れるため、もはや、こうすることしかできなかった……。

先生「突然ですが、烏丸くんは転校することになりました」

女子生徒「やったあ～っ！」

男子生徒「ひゃっほーい！」

どうして、こんなことになってしまったんだろう？

ヤンキー「あに、見てるんだよお、てめえええ？ やる気があああああ!？」

烏丸「……………」

やる気なのは、どっちだ？ どんなおとなしくしていたって、目立つガタイの良さと目付きの悪さ。街を普通に歩いているだけで、烏丸はケンカを吹っかけられてしまう。

ヤンキー「おうおうおうおうっ！」

烏丸「……黙れ」

烏丸「往生せいやーっ!!」

ヤンキー「す、ずびませんでした……」

全国津々浦々を追われて逃げるがごとく転々としつつ、一応、高校へ進学した烏丸だったが、内申書に特筆される素行の悪さ、かつ偏差値の底辺たる彼を受け入れてくれる学校は不良の溜まり場でしかなかった。見渡せば校則無視、停学上等のワルたちばかり。もちろん、髪型や制服の着こなし、見た目だけで評価してはいけないとはわかっているが。

烏丸「俺と、やる気か？」

烏丸「邪魔するんじゃねえ！」

烏丸「何、見とるんじゃ、わーれー!!」

売られたケンカは、もれなく買うようにしていたし、拳と拳で語り合うのも男同士のコミュニケーションの一種みたいな。勝利の後に敗者との友情なんて決して芽生えなかったけれど、それはともかく荒んだ環境が、烏丸の生き方を決定付けてしまったのである。

そうこうしているうちに、毎日ケンカに明け暮れる荒くれ者のレッテルを貼られ、烏丸は最初の三年間で高校を卒業できなくなってしまった。留年することは吝かではなかったが、学校の都合を押し付けられたくなくて、頑なに自主退学のススメを拒否していた。

先生「わかった、わかってる。今日は、悪い話じゃない。いい話があるんだ、烏丸。

君みたいな生徒でも特別に引き受けてくれる、とってもいい高校が見つかったよ」

山奥にあり、有刺鉄線付きの塀に囲まれた更生施設のような全寮制の高校だろうか？

先生「ちょっと田舎にあるけど、普通の学校だから。普通科で、そこそこの進学校」

烏丸「まさか……」

そんなところが、烏丸のような超問題児を引き受けてくれるとは考えられない。

先生「一人分の転入枠があってね、条件つきで回してもらえるように手配したんだよ」

烏丸「条件？」

先生「何、簡単なことさ。君みたいな生徒には雑作もない。得意分野と言ってもいい」

先生「転校してみないか？」

烏丸「……………」

転校することには慣れている。だから、裏があるにしても断ろうとは思わなかった。

× × ×

生徒たちが立ち入れないはずの学校の屋上 。

逆光の人影二人 。

譲葉「お待ちしてました、烏丸渉さん」

一人は学級委員の譲葉 。

烏丸「あんたか……」

烏丸「俺の相手は……」

そして 。

葛巻「……………」

譲葉の隣りで、気だるそうに立っている葛巻 。

譲葉「何か言えば？」

葛巻「……………」

わしゃわしゃと、ぼっさぼさの髪の毛を掻きむしるだけ。

烏丸「フッ」

鼻で笑って、烏丸が応じる。

葛巻「……………」

烏丸「……………」

烏丸が一步一步、近寄ってきて、視線逸らさず、睨み合う二人　　。

讓葉「どーゆー状況なのか、お互い、わかってるなら問題ないってことで？」

葛巻「おい………」

讓葉「どうしたの？」

葛巻「まだ納得してないんだが、俺としては………」

讓葉「この期に及んで、面白いタワゴト、ありがとう」

讓葉「烏丸さんは？」

烏丸「問題ない。転校するに当たって、ただひとつの条件　　」

烏丸「俺は、こいつを、ぶちのめせばいいんだろ？」

葛巻「……………」

校内放送『もうすぐ下校の時間です。校内に残っている生徒は、急いで帰りましょう』

夕闇が迫る校舎に物悲しいトロイメライの曲が流れて　　。

烏丸「この学校のヤツは、おとなしすぎて、張り合いがなくて、相手にもならん。

暴れるに暴れられないし、むしろ、ここまで、よく我慢したもんだ、俺なりに」

葛巻「……………」

烏丸「うずうずしてる。ワクワクしてる。ドキドキしてる。楽しみだ、わかるだろ？」

葛巻「わかんねえよ………」

讓葉「ちょっと待ってください！」

慌てて讓葉が、殺気立つ二人の間に割って入る。

讓葉「ルールを説明します」

烏丸「ルール？」

葛巻「……………」

讓葉「お二人には、これから簡単なゲーム、度胸試しで勝負してもらいます」

讓葉「まずは、あちらのフェンスの上に上がっていただきます」

手すりと呼ぶには結構な高さのフェンスが、屋上には張り巡らされている。バレーボールのネットくらい、二メートルちょっと。そんな欄干の上に登れ、とおっしゃるか!?

讓葉「落ちれば負け。落とせば勝ち。とても、わかりやすいルールのゲームです」

烏丸「おいおい………」

手前に落ちればフェンスの内側で大したことないが、向こう側に落とされればシャレにならない。三階建ての校舎。頭から落下しない限り、死にはしないと思うが、危険性は残る。そもそも、この辺りの下が、どうなっているのか。土？ コンクリート？ クッションになるような木々の茂みがあったかもしれない。花壇の周囲は煉瓦のブロックだった。

烏丸「……マジか？」

葛巻「ぶちのめしに来たんだろ、俺を？」

怖気づく烏丸を挑発してくる葛巻。せせら笑い、狂気じみた表情が浮かんでいる。

葛巻「でもな、逃げ帰れる場所があるなら、そうした方が自分の身のためだ」

讓葉「まっ、そーゆーことです」

讓葉「リタイア、ギブアップ宣言を今なら認めます。どうしますか？ 烏丸さん」

烏丸「やるさ。上等だ。何だって、やってやるさ！」

どんな条件であれ、正々堂々、一対一のタイマン、ビビって逃げる選択肢はない。

校内放送『下校の時間を過ぎました。さよなら、さよなら、さようなら』

校内から生徒の姿が見えなくなり、真っ暗闇に包まれていく校舎。

讓葉「決闘の時間です！」

讓葉「右か、左か、選んでください、烏丸さん」

烏丸「どっちでもいいけど……」

途中、どこにも足を掛けることもできず、容易には乗り越えることができないフェンスに立てかけられた二本の梯子。烏丸は適当に一方へと進んでいく。横を窺うと、梯子に足をかける手前のところで葛巻が上履きを脱ぎ、揃えている。裸足になって戦うようだ。

烏丸「……縁起でもないことしやがって」

しかし、真似をする。靴下も脱ぐ。足場は予想以上に細く、滑りたくないからだ。

讓葉「ちなみに、相打ちの両者転落は先にフェンスの上に戻ってきた方が勝者です。

共に復帰できず、ゲーム続行が不可能と判断した場合のみ、引き分けとします」

烏丸「くっ……」

フェンスの上に手をかけ、足を乗せるも、なかなか立ち上がれない。しかし、いつまでも、しゃがみこんでいるわけにもいかず、逆に不安定だ。思い切って手を放し、

烏丸「う、うう……」

膝と腰を伸ばしていく。ぷるぷると足が震える。体勢を崩し、落ちればアウトである。目の前は、自然あふれる山並み、田畑が広がっている。眼下は校庭。たぶん、土だ。

烏丸「ど、どうだ……。よし……」

両手を伸ばし、左右に揺れながら、やじろべえのように丁度いいバランスを探る。

烏丸「よしよし……。ふ、ふう……。イケる、イケるぞ……」

身体の方角を横に、両足をずらしていく。葛巻と向かい合う形を作る。少し安定した。

烏丸「わぁっ！」

横風が吹く。それだけでバランスを崩しかけ、大きく腕を回す。烏丸は、ふらふらだ。

葛巻「……………」

一方の葛巻は微動だにしない。余裕さえ感じる。この戦い方に慣れているのだろう。

烏丸（ヤベエぞ！ 俺に勝ち目あるのか？）

負けるにしろ、落下する内外で大違いだ。頭の中に勝つビジョンが浮かんでこない。どうしたってダメージの少ない負け方を考えてしまう。この条件を飲んでしまった以上、有利、不利は戦う前から、ハッキリしていた。始まってみないとわからないこともあるが。

讓葉「レディ、ファイト！」

が、

烏丸「あ……」

足が震えて、全く動けない烏丸。始まってみたものの、どうしようもない。一方、

葛巻「さーて、どうしようか？」

その場でジャンプする。細さ、高さ、足場の悪さをものともしていない。ぴょんぴょんと飛び跳ね、身軽さを見せつける。しっかり作られているフェンスだが、少し揺れる。

烏丸「な、何すんだよ……」

もちろん、落とすにかかってきてるわけだが、わずかな揺れも烏丸には恐ろしい。

葛巻「かかってこないなら……」

前へ、じりじりと進む。最初、ゆっくりとした動きを見せる。すり足で、ゆるり、

葛巻「俺から行くぞ！」

タイミングと距離を計りつつ、そこから、ぐんっ、と一気に間合いを詰めてくる。

烏丸「……なっ!？」

だん、だん、だんっ！ 葛巻は烏丸に向かって急加速、フェンスの上を走ってくる。

烏丸「ちょ、待て……」

葛巻「そりゃ！」

烏丸「ちっ！」

蹴りが入る。バシッと乾いた音が鳴る。葛巻は、片足立ちの姿勢。烏丸はハイキックを腕でガードする。通常なら、どうってことない一撃も、この危うい状況下ではバランスを逸してしまう。ふらつく身体が何とか保つように、ぐねぐねと捻る、反る、変な踊り。

葛巻「ほいつ!!」

烏丸「くそっ!!」

隙だらけで無防備な烏丸の眉間を狙って指を一本、突き刺してくる半笑いの葛巻。小バカにされていることは間違いない。わかっている、対処できない。変な踊りは続く。

葛巻「おら、おら、おら！ おらおらっ!!」

烏丸「なっ、んな、あひ！ おっととと!!」

一方的な攻撃を受け続け、いたぶられながら、烏丸は後ろに下がっていく。自転車が走り始めれば、むしろ安定するように、身体が動きだして、ようやく変な踊りが止まる。

とは言え、いつまでも下がり続けることはできない。見えない後ろ歩きはフェンスを踏み外す危険性がある。しかも、このままだとフェンスは角、九十度に折れ曲がっている。

烏丸（うっちゃる！）

それなりの修羅場をくぐってきた男としての刹那の判断。どう反撃するのか、踏みとどまるのではなく、このままの勢いを利用して、葛巻をかわし、校舎の外側へ押しだしてやろうと考える。フェンスの角まで後もう少し。いかに油断させ、大逆転へ導きにかかる。

烏丸「アー、アラ、アナ、アハ、アパー、ウキョ、ウヒョ、ウニョ、ウンチョロリ！」

烏丸は奇声を上げ、変な踊りを再開した。引き寄せるように、ギリギリの間合いの中、
烏丸（さあ、来い!!）

初めて勝てる可能性をビジョンとして得た。一瞬、後方に目をやる。角を確認する。

葛巻「どらぁーっ！」

烏丸「キーターッ！」

烏丸は、葛巻の突きを払い流しながら、自らは斜め後方へと足を伸ばす。そこに直角に折れた先のフェンスがあるはずだ。思い切って、イチかバチかの覚悟で身を投げだす。

葛巻「何っ!？」

横にかわされ、驚く葛巻。ただし、うっちゃられるほどの反動は食らっていない。

烏丸（しまった！ 見切りが早かったか!？）

フェンスの角で攻防は入れ替わることなく、それ以前に滑り、足を踏み外してしまう。

烏丸（終わった……）

と思いきや、倒れていく烏丸の腕を、葛巻がつかむ。

烏丸「えっ!？」

引っ張られると、

葛巻「そっちじゃねえよ」

捻り上げられ、

烏丸「……うおっ！」

反動で入れ替わり、

烏丸「あ……」

押しこまれ、

烏丸「うわあああああぁーっ！」 宙に投げだされた。

烏丸「ふ、普通に戦えば、こんなことには、ならんかったぞおおおーっ!!」

落ちる。

烏丸は、落ちていく。

頭を両腕で抱えながら、丸くならうと受身を取る。

ドスン!!

× × ×

四日目 。

朝のホームルーム 。

教師「えー、急な話だが、烏丸くんは一身上の都合により転校しました」

クラスメイト「「……………」」

休み時間 。

教室の片隅で、数人のクラスメイトの間から、ひそひそと会話が始まる 。

男子生徒「また転校だって」

女子生徒「……ふーん」

To be continued...

斬殺　　。

深夜、雑居ビルの屋上　　。

中年男「た、た、頼む、お願いだ。見逃してくれ……」

手下が殺され、一人、ついに逃げ切れないと判断し、息も絶え絶え、命乞いを始めた。

中年男「カネなら、この財布ごと、持っていけばいいから！ なっ、いいだろ？」

拝むように土下座をする無様な中年男は、ぱんぱんに膨らんだ長財布を投げだす。

中年男「い、い、い、い、命だけは、命だけはあああああああああああ一つ!!」

血まみれの日本刀が迫り、絶叫する。それが、断末魔の叫びとなった。

刺客「……………」

刀の血と油は気になるが、返り血を浴びたことには頓着せず、携帯電話《ケータイ》をかける。

刺客「任務完了しました」

携帯電話『よくやった、ご苦労さまでした』

財布を一瞥して、追いはぎに落ちぶれてしまいそうになった自分に、ため息……。

携帯電話『どうした？』

刺客「いえ……」

携帯電話『警戒を怠るな、以上』

刺客「い、妹は……」

携帯電話『次の連絡を待て』

刺客「そよに会わせてくれないか……」

携帯電話『大丈夫、安心して。今頃は、もう眠っているわ』

×　　　×　　　×

朝のホームルーム　　。

クラスメイト「「……………」」

教師「えー、わかっちゃいると思うが、うちのクラスに、また転校生だ」

教師の後ろから、見ず知らずの生徒が現れる。このパターン、この教室ではよくあるお約束のシーンらしく、見慣れたクラスメイトのノーリアクションっぷりたら、逆にビックリする。もうちょっと、ワーキヤー盛り上げてほしい気持ちもあったり、なかったり。

転校生「……………」

しかし、まあ、遊びじゃないんだし。身を引き締め、浮かれだす気持ちを抑える。

転校生「叢雲疾風《むらくも はやて》です。よろしくお願いします」

黒板に自分の名前を書き終えると、振り返って挨拶する転校生、叢雲疾風。

教師「……これは？」

担任の教師はメガネに手を添えて、わざとらしく叢雲《むらくも》の腰元を注視する。

叢雲「護身用です。校長と教頭の許可は得ていますので、問題ありません」

教師「そ、そうですか。護身用としてなら仕方ありませんね……」

ハンカチでメガネを拭いて、しっかり見たけど、見ていないような感じで誤魔化した。

教師「えー、何かあれば、学級委員の譲葉《ゆずりは》に訊くように」

譲葉「はい」

いかにも委員長っぽい真面目そうなメガネの男子生徒が、姿勢よく手を上げている。

教師「それから、えー、確か席は、葛巻《くずまき》の隣が空いているんだったな」

教室を見渡せば、窓側、やや後方、一番のポジションの席が空いている。隣りは、葛巻「……………」

ボロボロの学生服を着た男子生徒が机に突っ伏していた。完全に拒絶している。

譲葉「はい、ここです」

学級委員の譲葉玲人《ゆずりは れいじ》が、誰もいない自分の前の席を指し示した。

譲葉「困ったこと、わからないことがあれば、何でも訊いてくれ」

叢雲「よろしく……」

フランクな笑顔に、思わずギロリと睨み返してしまう。

教師「えー、それじゃあ、みんな、仲良くするように」

気の弱そうな担任は、悲しげな表情でポツリと付けくわえる。

教師「……短い付き合いになるかもしれませんが」

一時限目 。

休み時間 。

二時限目 。

休み時間 。

三時限目 。

休み時間 。

四時限目 。

そして、昼休み 。

讓葉「昼だぞー、メシー」

葛巻「……………」

讓葉は午前中、ずっと眠りこけていた葛巻大地《くずまき だいち》の肩を揺する。

讓葉「叢雲さんは、どうします？」

叢雲「どうします、とは？」

讓葉「弁当を持ってくるならいいですけど、購買部の方でパンとか、オニギリとか、お茶とかジュースを売ってるから、買いに行くなら、いっしょにどうですか？」

四時限目が終わった直後、チャイムが鳴り響く中、教師を押しよける勢いで我先にと多くの男子生徒たちが教室から飛び出ていった。給食かつ学食のない多くの高校がそうであるように、購買部では数少ない人気惣菜パンの争奪戦が繰り広げられているのだろう。

讓葉「案内しますよ」

叢雲「だったら、案内してもらおうかな」

腹が減っては戦はできぬ。食べられるときに食べておく腹ごしらえは重要である。

讓葉「葛巻は、どうする？」

葛巻「……………」

俯いた頭を上げることなく、葛巻は右手を振って、断りの合図。まだ寝るつもりだ。

讓葉「じゃ、行きますか」

二人は連れ添い、階段を降り、一階へ。渡り廊下を通り抜け、生徒であふれる購買部へと向かった。入り口の段階で満杯である。自動販売機付近も喧騒、ごった返していた。

讓葉「残り物でよければ、そんなに急ぐ必要もありませんが、

そもそも僕は混んでいるところに飛びこむのは苦手ですてね……」

先陣たる第一陣は早々に立ち去っているものの、授業の長引いたクラスの男子、多くの女子生徒が後続となり、入れ替わり、必死に押し合いながら目当ての買い物をしている。

叢雲「フッ。だったら……」

立ちはだかる生徒たちに向かって、叢雲が腰の長物に手をかけたとき 。

生徒たち「「あっ!!」」

男子生徒「「讓葉さんだ」」

女子生徒「「讓葉さんよ」」

生徒たち「「 てことは」」

男子生徒「「あいつが転校生か」」

女子生徒「「あの人が転校生……」」

突然、二人の目の前、たむろう群集が割れて、モーゼのごとく歩む道が開いていく。

叢雲「どーゆーことだ？」

讓葉「困ったもんだ……」

ホント、やめてほしいんだけど、このノリ。あからさまに怪しく思われるではないか。

戻ってきて、再び教室。

讓葉「……転校生狩り？」

叢雲「聞いたことありませんか？」

讓葉「ええ、まあ、噂では……」

讓葉は、叢雲の質問に少し困った表情を作って、応じる。

讓葉「……それなりに、色々」と

葛巻「……」

讓葉「逆に僕からも、ひとつ質問だけど、その腰の護身用って？」

叢雲「ああ……」

讓葉「真剣？」

叢雲「もちろん」

カチャリと鯉口を切り、隙間から中身の輝く刃を見せてくれる。本物の日本刀だ。

讓葉「うわぁー」

葛巻「……」

× × ×

五時限目。

休み時間。

六時限目。

そして、放課後。

叢雲「さて、これから、どうしようか……」

思わず、独り言を呟く。帰りのホームルームが終わった途端にクラスメイトの多くは、すでに帰り支度を整えていたため、とっとと帰宅ないし部活へ教室から出ていった。

讓葉「転校初日、どうだった？」

叢雲「少し気疲れしたかな。普通の高校生って、こんな感じだったのかな、って思った」

どこかクラスの空気はピリピリとして、馴染めぬ雰囲気だった。勉強は無理。全く理解できず、ひたすら退屈な授業だったが、ようやく解放された。午後の授業は隣の席の葛巻を見習い、眠ることにした。身体の節々が強張る。転校生は特別扱いなのか、先生も見逃してくれた。もちろん、私語をして周りに迷惑をかければ注意されるのかもしれない。

讓葉「……普通の？」

叢雲「普通の転校生らしく、おとなしくさせてもらったよ。一日目だし」

知らない同年代の男女が集まる場所に飛びこむのだ。結構、緊張してしまった。

讓葉「それはそれは。どこか見たいところとかあれば、これから案内するけど」

叢雲「ありがとう。でも、一人で、ぶらぶらしたいから」

讓葉からの申し出を断り、叢雲は一人、勝手気ままに校内をうろつく。

グラウンド。

テニスコート。

弓道場。

体育館。

体育館裏。

叢雲「お前が、転校生狩りか？」

叢雲は、頭ひとつ高い大男と向かい合っていた。

大男「……転校生狩り!？」

気は決して強そうには見えないが、体格のいい大柄な男子学生である。

大男「ぼ、僕が、ですか？」

叢雲「いかにも、噂通りの大男じゃないですか？」

大男「ち、違いますよっ！」

バスケットボール部一の大男は汗っかき、必死になって慌てて否定している。

大男「誰に聞いたか、どんな噂か知りませんが、僕は、そんな怖いことしていません。

ケンカとか、決闘とか、闇討ちとか、そーゆーの、野蛮じゃないですかっ!!」

体育館での部活終わり、見学していた転校生に呼びだされた体育館裏。大男が周囲を見渡すと、見て見ぬフリをする、やじ馬たち。助けてくれそうな勇気ある生徒は現れない。

叢雲「そうですか？ ……たぶん、そうなのでしょうね」

不敵な笑みを浮かべながら、叢雲は宣告する。

叢雲「でも、狩られるのを待っているのは性に合わないから……」

腰の日本刀を、ゆっくり抜く。

叢雲「百パーセント人違いだったとしても、僕はあなたが転校生狩りだと思いました」

刃先を向ける。

叢雲「だから、斬る！」

大男「じょ、冗談だろ!？」

叢雲「そう見えますか？」

大男「ヒヒィーッ!!」

二日目。

叢雲「おはよう」

クラスメイト「「……………」」

静まる教室。

叢雲「……何か？」

讓葉「おはよう。噂になってるよ」

叢雲「へえー、どんな噂ですか？」

讓葉「……それなりに、色々」

讓葉は眉を顰めた。

叢雲「噂はどうであれ、僕が果たしたいのは、転校生狩り斬りなのです」

叢雲は腰の日本刀をさり気なく誇示させながら、怯えるクラスメイトに呼びかける。

叢雲「この学校では、転校生ばかりが襲われる痛ましい事件が繰り返されています。

何故か、表沙汰にならないものの、そんな凶行は止めなくてははいけません」

クラスメイト（（お前が言うなよ……………））

叢雲「だから、同じクラスのよしみ、みんなも協力してくれると嬉しいのですが」

瑛子「どうするー？」

琵琶子「無理無理、無理ー」

椎子「ごめんなさーい」

讓葉「……悪いね」

叢雲「確かに、とばっちりには怖いからな。関わり合いたくない気持ちも、わかります。
無理言って、すまなかった。それでも、何か手掛かりがあれば教えてほしい」

叢雲「そして、転校生狩りよ。聞いているか？ 僕の刀と早く、勝負しよう！」

葛巻「……………」

放課後 。

体育館横 。

叢雲「確かに、転校生狩りが一人とは限りませんか……」

叢雲は、血気盛んな柔道着の面々に取り囲まれていた。

叢雲「皆さんは、僕に何の御用ですか？」

叢雲「僕に用があるのは、彼だけだと思いますけどね」

ぐっと足を開き、腰を下げ、柄と鞘にそれぞれ手を添え、居合いの構えを見せると、
柔道部員「「まっ、待て!!」」

戦意喪失……。歯向かうつもりがないことを両手の掌をかざして、アピールする。

太男「まずは、話し合おうじゃないか？」

それでも一人、立ちの上がる豪胆な男がいた（足の震えは隠せなかったが）。

太男「転校生だけが狙われている以上、正当防衛みたいなものはありえると思う。

だがな、昨日のあれ……。あれは違うだろ？ ムチャクチャだ!!」

柔道部で見つけた重量級、一番の巨漢。叢雲が狙う次のターゲットであった。

太男「全然関係ねえもんに出しやがって、お前、どう責任取るつもりなんだ!？」

叢雲「噂では、転校生狩りは、とてつもないデカブツと聞いたからですよ」

悪びれる素振りも見せないどころか、じりじりとにじり寄り、間合いを縮めてくる。

太男「デカブツって、俺のことか？ 違う違う。それは、番長のことじゃないか？」

叢雲「今時、番長？ ふふーん、そうか。で、そいつは、どこに？」

番長のいるような高校には見えなかったが。風紀的にキッチリしてて勉強もできるのだろう、部活も盛んであり、生徒の多くが真面目そうで、ほとんどワルのイメージがない。

太男「近づくな。ば、番長は、半月くらい前から怪我で入院されとるんじゃ！」

叢雲「……入院？」

心底、嫌そうな顔を浮かべる。

叢雲「どこの病院ですか？」

太男「知らんが、……どっかの病院じゃろ？」

柔道部員に確認するが、全員が首を傾げたり、横に振ったり、ハッキリしない。かつて番長と恐れられた男がいて、ある日、突然、いなくなったことだけは確かなようだ。

叢雲「とどのつまり、その入院している番長さんが転校生狩りってことですか？」

いつでも抜刀できる体勢で、凄む。

太男「つ、つまり、じゃねえ！ 学校に来ていない番長に何ができるんだ？」

昨日の噂は聞いている。どうしたって逃げ腰になるのは仕方ない。

太男「お前が転校してくる直前、先週も転校生狩りは続いているがな……」

叢雲「……ならば」

鯉口を緩める。

叢雲「どこにいる、転校生狩り!？」

校舎、屋上　　。

体育館横の喧騒を見下ろす男子生徒二人　　。

叢雲「臆したかっ!？」

白銀に輝く大太刀を振りかざして、暴れる叢雲の姿が見えた。

叢雲「出てこい、転校生狩り!!」

太男「うわわあーっ！ こいつ、マジ危ねえー！」

柔道部員「逃げろーっ!! 殺されるぞーっ!!」

取り囲んでいた柔道部員がバラバラに散って、ほうほうのていで逃げだしている。

讓葉「このまま、ずっと逃げているつもり？」

葛巻「何もなければ、いつまでも、そうしていたい気分さ」

讓葉「何もしなければ、他の誰かが余計な迷惑をするだけ」

葛巻「……」

葛巻は言い返さず、不満げに口元を歪める。

讓葉「あの男は、危険だ」

転校してきて二日目で、初日に続く酷い流血沙汰。およそ学校生活に向いていない。

讓葉「もしかしたら、今の転校生狩りよりも、ずっと……」

葛巻「ああ、わかってる……」

讓葉「わかってる、わかってるだけじゃダメなんだけどね……」

葛巻「……………」

フェンスに寄りかかり、葛巻は空を見上げた。

× × ×

数日前。

病院。

個室の病室。

コンコン、と力なくドアを叩く音。

少女「……どうぞ」

女の子が一人、ベットの上で気だるく、つまらなそうに本を読んでいる。

叢雲「元気にしてるか？ そよ」

そよ「お兄ちゃん！」

その声に、叢雲《むらくも》そよは驚く。待ちに待って、待ち焦がれた兄の疾風《はやて》がやってきた。

叢雲「手術、終わったんだってな。よかった」

そよ「よかった、ですって？」

内心、嬉しいけれど、精一杯の怒りを見せる。

そよ「ずっと、どこに行ってたの!? 連絡くれないし、誰も教えてくれないし……」

そよ「……私のこと、心配じゃないのかな？」

長期の入院生活は、人を疑心暗鬼にする。幼い頃、両親を亡くし、頼れるような身寄りもなく、兄妹二人っきりで生きてきた。そんな境遇で自分は身体が弱く、わずかな余命を伸ばすためだけに何度も難しい手術を受けてきた。兄には苦勞をかけっぱなしだった。

叢雲「心配だよ」

明るく、笑って、重々しくならないよう、だけど心を込めて、叢雲は言った。

叢雲「ずっと心配していた」

そよ「そよも、お兄ちゃんのこと、心配だったよ……」

たった、これだけのやりとりで、そよは涙が出そうになる。

叢雲「いい子にしてたか？」

そよの頭に手を伸ばす。

そよ「あ……」

頭に触れられる直前、そよは脅える仕草をした。

叢雲「……………」

叢雲は、伸ばしていた手を気まずそうに戻す。

そよ「ごめんなさい。髪の毛、洗ってないし、ボサボサだし、ごめんなさい」

叢雲「いや、まあ、その、なんだな、そんなこと全然、気にしないよ。

それどころか、前より顔色も良くなったし、元気そうで何よりだ」

土気色した肌に、喜びであれ、怒りであれ、恥ずかしさであれ、血色が戻っているように感じるのはカーテン越しの柔らかい太陽光のせいかもしれない。そんな錯覚すら、今は欺瞞じゃない。そよの先行きを不安視していた叢雲は、今日、心の底から希望を持てた。

叢雲「それに、ちょっと、ふっくらしたかな？」

そよ「えー、太ったってことー？」

骨ばった細い手を、こけた頬に当て、痩せぎすな身体が揺れる。

美人女医「そよちゃん、そろそろ、いいかなー？」

白衣を身にまとった若い女性が病室に入ってくる。そよの担当医だ。

そよ「漣《さざなみ》先生、お兄ちゃんがお見舞いに来てくれたんだよー。手ぶらでー」

美人女医「へー、それは、よかったわねえー。また手ぶらかー」

漣久遠《さざなみ くおん》は、叢雲の腰を見やった。

叢雲「すみません」

漣「いいの、いいの。いつものことでしょ？」

叢雲「差し入れなんて何を持ってきていいのか、わからないし……」

そよ「面白い本を買ってきてほしいけど、お兄ちゃんに私好みの面白い本なんて、

選べないだろうし。……そうね。だったら、花がいい。キレイなお花！」

そよが指し示す白い花瓶には花が活けられておらず、空っぽだった。

叢雲「わかった。次、来るときは必ず」

漣「私は、私はねー、お金ー」

叢雲・そよ「「……すみません」」

漣「やーねー、マジに受け取らないでよ。冗談よ、冗談！ 賄賂なんていないからね」

そよ「で、でも、手術にお薬、入院費用も、ものすごいお金が必要なんでしょ……」

何度も手術を受けてきた。一日三食以上の薬漬けで、ずっと個室に入院している。

叢雲「そんなこと、そよは気にしなくていいから。自分のことだけ、考えていれば、
そよが元気になってくれれば、それが兄として僕の一番なのだから」
そよ「お兄ちゃん……」

叢雲「僕が、しっかり働いて、ちゃんと払っているから、な？」
そよ「……危ないこと、してない？」

叢雲「……う、うん」
隠しておきたいつもりなんだろうけど、動揺で硬直。バレバレだよ、あんた……。

漣「大丈夫、大丈夫。どうしようもなくなったら、私としてはね」
枝垂れかかろうとして、かわそうとする叢雲を追いかけ、肩に頭を寄せて、
漣「疾風くんの身体で支払ってもらっちゃおうかしら？ うふふ」
叢雲「か、勘弁してください、冗談は」
漣「結構、これって冗談じゃないんだけどなー。つれないんだから、い・け・ず」

そよ「……」
どう反応していいか、わからない。お兄ちゃんのこと大好きだけど、漣先生のことも大好きだし、てゆーことは、そーゆーことになっても、いいよーな、やっぱり困るよーな？
そよ「ド、ドキドキしてきた……」

叢雲「大丈夫か!？」
漣「落ち着いて」
そよのか細い手首を取り、時計の秒針と照らし合わせながら、心拍を計る。
そよ「ちょっとドキドキしてきたただけだから、大丈夫……」
漣「あははっ、そよちゃんには、ちょっと刺激が強かったようね」

叢雲「……本当に大丈夫か？」
そよ「心配しないで。私、強くなったんだから」
ベッドに横たわり、握力一桁だろう力ないガッツポーズ。弱々しい笑顔が痛々しい。

叢雲「なら、漣先生にワガママとか言って、あんまり迷惑かけるなよ」
精一杯、叢雲も笑ってみせた。
叢雲「じゃあ、またな。そよ」

そよ「えっ、もう行くの？」
叢雲「忙しいからな。すまん、また時間ができたら、すぐ会いに来るから……」

病室を出た叢雲の顔は険しかった。
叢雲「……」

廊下で待機していた白衣の助手に預けていた日本刀を返してもらおう。

漣「それじゃ、お大事に一、そよちゃん」

しばらくして、カルテをぷらぷら振りながら、漣が病室から出てくる。

漣「……どう、あの子、見違えるほど元気になったでしょ？」

元々、ハスキーボイスだったが、より低い声。薄暗い廊下で、クールに響く。

叢雲「妹のこと、頼みます」

叢雲は頭を下げる。

助手「これからも面倒見てやれるかどうかは、お前の働きぶり次第だな。

余計なことを考えず、お前は、お前の任務を果たせばいい。

それが、人を斬るしか能がないお前と、可愛い妹のためだ」

叢雲「……」

漣「疾風……」

悔しいが、その通りだ。

叢雲の腰には刀がある。振るえる力がある。

そして、妹は可愛い。

漣「……泣くなよ」

叢雲「な、泣いてなんかいません……」

叢雲「ただ、そよが本を読んでいたんです」

病室の中での短いながらも濃密だった妹との再会を回想していた。

漣「そうだな……」

助手「それが、どうしたんだ？」

叢雲「あいつ、昔から本が好きだったんです」

目尻を拭う。

叢雲「怒ってたし、泣いてたし、笑ってたし、感情を露わにして」

漣「薬の量は徐々に減らしている。まだ、少しばかり、ぼやんとしているがな」

生きるか死ぬかの瀬戸際にあって、薬の力で頭の中の働きを眠らせていた。

叢雲「痛くないんですか？ 苦しくないんですか？」

漣「経過は良好だよ。むしろ、予想以上に、いい。だから、安心しろ」

手術は完璧だった。今のところ、拒絶反応は出ていない。漣は胸を張る。

漣「痛みもある。苦しくもある。しかし、死ぬほどじゃない。全て、回復の過程だ」

漣「しばらくすれば、車椅子で外出も許そう。リハビリをさせなくてはな」

叢雲「また歩けるようになりますか？」

いつか、この病院を退院して、二人で普通の生活を暮らせれば。夢のような夢だ。

漣「本人のやる気次第だが、平均台の上で、逆立ちで走れるようになってもらおうさ」

叢雲「はははっ。それは、すごい！」

そんな日は決して訪れないと思うけど、せめて、そよだけは幸せに生きてほしい。

漣「本気にしてないなー？」

叢雲「だって、そんな元気いっぱいなそよ、想像もできないから……」

叢雲「……次は、誰を斬ればいいんですか？」

助手「近々、田舎の、とある学校に高校生として転校してもらおう。そこで」

× × ×

三日目。

放課後。

夕暮れの校舎。

薄暗い階段を登っていく叢雲。

屋上へ出る鉄扉に書かれている警告文『関係者以外立入禁止』。

叢雲「……よお」

扉の向こう側を見やっ、叢雲は手をかざし、目を細めた。夕日が差し込んでくる。

逆光の屋上に立つ人影、二人。

譲葉「お待ちしてました、叢雲疾風さん」

一人は、面倒見のいいメガネの学級委員、譲葉。

葛巻「……」

そして、いつものようにやる気なさげにガシガシと頭をかいている葛巻。

叢雲「……そうですか、なーんだ」

転校生狩りに合わせてやるから、放課後、屋上に来い。その言葉を信じやってきた。

叢雲「やっぱり、君が転校生狩りでしたか……」

讓葉「あれ、意外じゃなかった？ バレバレって感じだったかな？」

叢雲「転校生狩りは、とてつもないデカブツって聞いていて、探してみたものの、
そんなヤツ、いなかった。たぶん、そいつは番長のことなんだろうけど……」

讓葉「そう、彼は転校したよ」

叢雲「……転校？ 入院じゃなくって？」

葛巻「ああ、やったんだ、俺が……」

ぐぐっと気合いを入れ、戦闘モードへ切り替える。

葛巻「あんたも、そうなるだろうよ」

叢雲「なんだと!？」

葛巻「同じ武器を！」

讓葉「わかった」

葛巻に一本の日本刀が手渡される。

葛巻「……」

叢雲「……」

真剣による殺し合いを前にして、目線逸らさず、睨み合う二人。

校内放送『もうすぐ下校の時間です。校内に残っている生徒は、急いで帰りましょう』

夕闇が迫る校舎に物悲しいトロイメライの曲が流れて。

讓葉「ルールを説明します」

葛巻・叢雲「「……」」

讓葉「お二人には、これから簡単なゲーム、度胸試しで勝負してもらいます」

讓葉「まずは、あちらのフェンスの上に上がっていただきます」

手すりと呼ぶには結構な高さのフェンスが、屋上には張り巡らされている。バレーボールのネットくらい、二メートルちょっと。手前なら落ちて、さして問題ないが、向こう側だと三階建ての校舎をまっ逆さまに転落してしまう。死にはしないと思うが、危険だ。

讓葉「落ちれば負け。落とせば勝ち。とても、わかりやすいルールのゲームです」

讓葉「リタイア、ギブアップ宣言を今なら認めます。どうしますか？ 叢雲さん」

叢雲「……まあ、いいだろう」

校内放送『下校の時間を過ぎました。さよなら、さよなら、さようなら』

校内から生徒の姿が見えなくなり、真っ暗闇に包まれていく校舎。

讓葉「決闘の時間です！」

讓葉「右か、左か、選んでください、叢雲さん」

途中、どこにも足を掛けることもできず、容易には乗り越えることができないフェンスに立てかけられた二本の梯子。叢雲は躊躇なく一方へと進んでいく。横を窺うと、梯子に足をかける手前のところで葛巻が上履きを脱ぎ、揃えている。裸足になって戦うようだ。

叢雲「なるほど……」

足場は予想以上に細く、ゴム底の上履きでは滑ってしまうからだろう。靴下も脱いだ。

讓葉「ちなみに、相打ちの両者転落は先にフェンスの上に戻ってきた方が勝者です。

共に復帰できず、ゲーム続行が不可能と判断した場合のみ、引き分けとします」

叢雲「……チッ」

すっと立ち上がっては見せたものの、想像以上の悪条件だった。普段と足の置き場が違うため、居合いの構えが取れない。身体を捻るとバランスを逸し、落ちてしまいそうだ。

叢雲（どうする？）

半身にして足を前後にした場合、若干、足は左右に開いている。当たり前だ。ここを一直線に保ったまま、高速で鞘から刀を抜く。引っかかる。無理だ。どうにかしないと。

讓葉「レディ、ファイト！」

叢雲（どうする!?)

葛巻が、その場でジャンプする。ぴょんぴょんと飛び跳ね、身軽さを見せつける。しっかり作られているフェンスだが、少し揺れる。叢雲にとって、そんな振動も無視できない。

葛巻「……」

すーと自然に中段の構え。剣道経験者っぽい。葛巻は最初から鞘を捨てていた。

葛巻「かかってこないなら……」

前へ、じりじりと進む。最初、ゆっくりとした動きを見せる。すり足で、ゆるり、
葛巻「俺から行くぞ！」

タイミングと距離を計りつつ、そこから、ぐんっ、と一気に間合いを詰めてくる。

葛巻「ヤーッ!!」

だん、だん、だんっ！ 葛巻は叢雲に向かって急加速、フェンスの上を走ってくる。

叢雲「……うわっ、た、た」

身体を引きながら、葛巻の一撃をかわし、追撃をあまらせ、鞘ごとで受け止める。

葛巻「トーッ!!」

叢雲（やっぱ、抜けなかった～）

鯉口から刃が半分、出ているだけで引っかかってしまった。目の前に葛巻の刀。力技での鏝ぜり合いに、じりじりと押される。間合いを取りたいが、そうはさせてくれない。

叢雲（僕が引くと、追い打ちがある……。狙うは体当たりからの引き技、か……）

葛巻「……メーン！」

引き面。さらに引く葛巻。叢雲も引いて、後ろに下がりながら、どうにか刀を抜いた。

叢雲（これで何とか互角に……？）

真剣と真剣による防具なしの剣道。試合場は細長く、前後にしか移動ができない。

葛巻「さーて、そろそろ本気で行くぞ！」

大きく上段に振りかぶる。

葛巻「おらおら、おらーっ!!」

キン、キン！ キーン!!

叢雲「なっ、なっ、ひえっ!!」

讓葉（初めての武器格闘で、人斬り剣士が対戦相手。どうなることと思っただが……）

やるじゃないか！ 葛巻の太刀筋は悪くない。しっかりしたものだ。というか、こんな足場で、このスピード、どんな足捌きしてるんだ。脇から見上げていて、激しい剣戟の応酬に目が行きがちだが、二人の体裁きの差は大きい。叢雲には危うさ、怖さがある。

讓葉（しかし、それは人として当然だ。よく持っている方、なのかもしれない……）

葛巻「そりゃーっ!!」

それでも反撃のチャンスを狙っていた叢雲は、葛巻の打突を裏から払い、踏み込み、斬り返しを狙う。対して葛巻は、しなやかな身のこなしで低く、屈みこませ、いなした。

叢雲「まだまだーっ!!」

一瞬、刀が見えなくなる。

叢雲「て、えっ!？」

足元より、ずっと下、地上なら地面に引っかかってしまうような低さからの逆袈裟！

葛巻「どらぁーっ!!」

飛び落ちる覚悟じゃないと、かわせぬ。かと言って、斬られるわけにはいかない。

叢雲「こ、こなくそーっ!!」

一閃させた刀を無理矢理反転させて、何とか止める。叢雲の身体は宙に浮いた。

葛巻「ぐあああああああああああああああああああーっ!!」

葛巻「うわあああああああああああああああああああーっ!!」

力任せに押しこまれる。こんなの、刀の使い方じゃない。棒っ斬れも同じだ。

叢雲「……チクショーッ! 後もうちょっとなんだーっ!」

落ちる。

叢雲は、落ちていく。

叢雲「こんなところで、終わるわけにはああああーっ!!」

ドスン!!

× × ×

数日後。

叢雲「そよはっ!？」

漣「こんなときまで、あなたって人は……。自分の身体の心配なさい、バカ」

叢雲「うぐっ」

頭が上がらない。手足の感覚がない。そんな動かない身体を気力で捻じ伏せる。

叢雲「そよは……」

漣「ほら、そこで眠っているわ」

叢雲「そよ……」

車椅子に座るそよが上半身を、叢雲のベッドに寄りかけて、眠りこけている。

そよ「お兄ちゃん! お兄ちゃん……」

漣「あんたもかい……」

目覚めて第一声が共に、唯一無二の存在を確認しあう兄妹二人に少し呆れたり。

叢雲「ごめんな、そよ。心配かけちゃったな」

見知らぬ天井じゃなく、部屋は違うにしても、ここが病院だと、ようやく思い至る。

叢雲「花、持ってこられなかった……」

そよ「そんなこと、どうだっていいよー」

そよ「でもどうして……」

組員「ウ～キ～ハ～シィ～！」(グリグリ)

組員「若頭の女に手を出すとは、お前、ええ根性しとるのう～」

金髪パーマに土足を押しつけられ、事務所の床に土下座させられている若い男。

浮橋「ず、ずびません……。ボンマ、ずびません……」

イケメンだったろう顔は、殴る蹴るでボコボコにされ、腫れあがっていた。

組員「謝って済むなら、わしらの立場がありゃしないだろが？」

組員「ウ～キ～ハ～シィ～！」(グリグリグリ)

組員「で、どっちや？」

浮橋「……どっちって何ですか？」

組員「どっちから誘ったかで、落とし前の内容も変わってくるやろが？」

浮橋「ど、どっちから誘ったかなんて、その……」

組員「男なら、ハッキリせえや」

組員「ウ～キ～ハ～シィ～！」(グリグリグリグリ)

若頭「もう充分だろ、そのくらいにしといたれ」

浮橋「あ、兄貴い……」

組員「よかったなあー、若頭が器の大きなお人で。自分の女、寝取られて、正味、

腸《はらわた》、煮えくり返ってるはずなのに、信じられへんなー？」

浮橋「はい……」

組員「信じられへんのか、ウ～キ～ハ～シィ～！」(グリグリグリグリグリ)

若頭「なあ、浮橋《うきはし》。お前、今年で、いくつになった？」

浮橋「じゅ、十八になりました」

若頭「そうか？ まだ十六、七くらいのクソガキに見えるけど、誤魔化してないか？」

浮橋「十八です！」

組員「若頭が十六、七くらいに見えると言われたら、十六、七くらいになれや」

浮橋「そ、そんな……」

組員「口答えすんな、ウ～キ～ハ～シィ～!!」(グリグリグリグリグリ)

若頭「高校は、どうした？」

浮橋「とっくの昔に辞めました……」

若頭「だったら、丁度いい。浮橋、お前、もう一回、高校生、やり直してこい」

浮橋「……ど、どーゆーことですか？」

組員「問い返すなや、ウ～キ～ハ～シィ～!!」(グリグリグリグリグリグリ)

若頭「……それ、やりたいだけだろ？」

× × ×

朝のホームルーム。

クラスメイト「「……………」」

教師「えー、わかっちゃいると思うが、うちのクラスに、また転校生だ」

担任教師の後ろをついて、教室に入ると、妙にピリピリとしたムードに面食らう。

転校生(ヤベエ、浮いてるなぁー、俺っち……)

入学以来、色々あったであろうクラスメイトの中へ、変な時期に突然、異分子たる存在が一人、混入するのだ。警戒するのは当然である。仲良くできるかな、と不安になる。

転校生「ちーす！俺、浮橋京介《うきはし きょうすけ》。十八歳でーす。

みんなより、ひとつふたつ年上ですが、関係なく、チョー緊張してます」

ばばっと黒板に自分の名前を書き終わると、自己紹介を始める転校生、浮橋京介。

浮橋(もちっと真面目っぽい挨拶の方がよかったかも？でも、らしくないし)

自分を隠して偽っても、いずれボロが出るのだから、むしろ最初の段階で、わかりやすい特徴を強調しておいた方がいい。どーゆー奴なのか、早めに理解してもらおう。

浮橋「見た目、こんなチャラチャラのチャラ男ですが、結構、根はイイ奴なんでー、

自分で言うなって感じですがー、スベってますがー、からこれー、しくよるー」

クラスメイト「「……………」」

教師「えー、何かあれば、学級委員の譲葉《ゆずりは》に訊くように」

譲葉「はい」

いかにも委員長っぽい真面目そうなメガネの男子生徒が、姿勢よく手を上げている。

教師「それから、えー、確か席は、葛巻《くずまき》の隣が空いているんだったな」

教室を見渡せば、窓側、やや後方、一番のポジションの席が空いている。隣りは、

葛巻「……………」

ボロボロの学生服を着た男子生徒が机に突っ伏していた。朝っぱらから熟睡モード。

譲葉「はい、ここです」

学級委員の譲葉玲人《ゆずりは れいじ》が、誰もいない自分の前の席を指し示した。

譲葉「困ったこと、わからないことがあれば、何でも訊いてくれ」

浮橋「しくよろー、しくよろー」

讓葉「……よろしく」

どうリアクションしていいのか、困っている姿を見て、内心ほくそ笑む浮橋だった。

教師「えー、それじゃあ、みんな、仲良くするように」

そして、気の弱そうな担任が悲しげな表情で不吉な予言を言い残して、出ていく。

教師「……短い付き合いになるかもしれませんが」

一時限目　。

休み時間　。

浮橋「ちょっと、いいかな？」

女子生徒「「……………」」

浮橋「うわっ、シカトされた!?!　これが、噂の転校生イジメですか？」

もっと、こう転校生ってもんは、ちやほやされるもんだと思っていたが、あれは小学生や中学生までの話で、高校生ともなればクールに対応してしまうものなのかもしれない。

浮橋「あの一、訊きたいことがあるんですが、よろしいでしょうか？」

それでも浮橋は諦めず、声をかけ続ける。女の子三人が仲間内で会話を始める。

瑛子「どうしようかな～？」

琵琶子「やめときなさいよ、転校生に関わるのは……」

椎子「転校生は、委員長さまに任せておけばいいのよ」

ぶいっと横向いて、浮橋のことは無視。気にせず、思い切って会話に参加してみる。

浮橋「えーと、委員長さまって、あの目付きの悪い陰険メガネのことかな？」

流石に周囲がざわめく。波風を立てることには成功したようだった。

瑛子「あれ～？　どこからか、男の人の声が聞こえるよ～？」

琵琶子「だから、やめときなさいって言ったのに。頭のおかしい人に関わるのは……」

椎子「そうそう、ヤバい転校生は、委員長さまに任せておけばいいのよ、つってね！」

二時限目　。

休み時間　。

浮橋「ねえねえ、俺たちは、転校生の浮橋。君たちの名前は？」

瑛子「げっ！　あいつ、また来たよ～」

琵琶子「なんか妙に馴れ馴れしいんですけど……」

椎子「こっちは迷惑しているってわからないのかしら、ゴミムシには？」

浮橋「だってさ、同じクラスに可愛い女子がいるんだよ。声くらい、かけるって。

うまく下心は隠して、お近づきになりたいってのが、男の嗜みでしょう？」

相手にされてないことはわかっているけど、その逆風の中を笑顔で乗り切ってみせる。

浮橋「だいたい、前の学校は男子校ではなかったけど、女子、少なかったし、

レベル低かったし。いや、ホント、マジで。レベル高いんだねー、ここ？」

瑛子「一方的にペラペラしゃべってるよ〜」

琵琶子「ごめんなさい。タイプじゃありませんから、生理的に無理です……」

椎子「しっしっ、あっち行け！」

三時限目　　。

休み時間　　。

浮橋「……やあ！」

男子生徒「「……………」」

浮橋「男もかっ！　まさか、ここまで嫌われているとは!!　まだ何もしてないのに」

普通に受験していたら、絶対、同じ高校に通うことなんてなさそうな異質な転校生だと言うだけで、こんな理不尽な扱い……。不当である。ある意味、正当かもしれないが。

松田「何で、僕たちに？」

浮橋「さあ、なんとなく」

女子三人組の拒絶、あまりの風当たりの強さに授業中、色々とシミュレーションしてみた結果、心が折れてしまった。気持ちを切り替えて作戦変更である。急がば回れ、だ。

浮橋「なんかハラ減ったなー。あれれー？　おいしそうなもん、食べてるじゃーん！」

竹田「やらんぞ……」

浮橋は、美味しそうな早弁を食べている男子三人組を次のターゲットにする。たかりに来たていで、仲良くなるキッカケにしようとしたのである。しいては、クラスに馴染む。

浮橋「クソッ、俺が転校生だからか!？」

梅田「これは、僕らの弁当だからです」

弁当の蓋を立てかけ、覆い被さる頭と両腕で、がっちりガードを固められてしまった。

浮橋「いや、違う。そんなわけない。四月からいっしょにつるんでいたなら、

俺たち、それくらいの融通が利くツレになれていたはずだ！」

松田・竹田・梅田（(む、無理じゃないかなー……)）

四時限目　　。

昼休み　　。

讓葉（さて、そろそろ行くか……）

讓葉「昼だぞー、メシー」

葛巻「……………」

讓葉は午前中、ずっと眠りこけていた葛巻大地《くずまき だいち》の肩を揺する。

讓葉「浮橋さんは、どうします？」

浮橋「うわぁっ、どうしよう！ ……って、何が？」

讓葉「弁当を持ってくるならいいですけど、購買部の方でパンとか、オニギリとか、お茶とかジュースを売ってるから、買いに行くなら、いっしょにどうですか？」

四時限目が終わった直後、チャイムが鳴り響く中、教師を押しよける勢いで我先にと多くの男子生徒たちが教室から飛び出ていった。給食かつ学食のない多くの高校がそうであるように、購買部では数少ない人気惣菜パンの争奪戦が繰り広げられているのだろう。

讓葉「案内しますよ」

浮橋「弁当あるから、別にいいよ」

松田・竹田・梅田「「あるんかいつ!!」」

浮橋「だが、しかし、一人寂しく食べると!? 転校生、大ピンチ!!」

すでに昼食を食べ終わった男子三人組はともかく、机を動かし、椅子を移動して、いくつかのグループで仲良くランチ中なのに、どこも受け入れてくれない、ハブられたまま。

讓葉「……誰か、いっしょに食べてあげて」

瑛子「仕方ないなぁ～」

琵琶子・椎子「「なんで、私たち!?!」」

浮橋「どーもども、サンクス」

瑛子「どういたしましたぁ～」

女子三人組のうち、瑛子《えいこ》だけがウェルカム。他の二人は警戒心を露わにする。

浮橋「そんなに嫌がらないでよ。おいらのガラスのハートが傷つくから」

琵琶子「ごめんなさい……。で、でも……」

視線を逸らす琵琶子《びいこ》。顔を近づけると、さらに全身ビクつかせて、そっぽ向いた。

浮橋「ショックだな。俺っちでば、そんなに怖い？」

椎子「その顔じゃ、何言っても、しょうがないでしょ？」

すっかりビビっている琵琶子を庇うように身を呈して、椎子《しいこ》が浮橋の顔を指差す。

浮橋「ああ、ちょっとヤンチャしちゃってね」

腫れぼったい顔面は痣だらけだった。何枚も貼られた判創膏でもボコボコに殴られた形跡は隠し切れない。いくらスマイルを浮かべても、ヤバめな男って感じがしてしまう。

浮橋「さーて、今日のおかずは、なんじゃろなー？」

覗きこまれても気にしないタイプだったので、弁当を全開オープンで披露する。

瑛子・琵琶子・椎子「「……キャーッ!!」」

松田・竹田・梅田「「なんだ、なんだっ!!」」

クラスメイト「「どうした、どうしたーっ!!」」

瑛子・琵琶子・椎子「「ハートマークよ、ハートマーク!!」」

浮橋「……………」

お弁当の中身は、カラフルで手がこんでいた。ご飯には桜でんぶを使って、ピンク色で大きなハートマークが描かれている。これは予想外だったらしく、浮橋は耳まで真っ赤！

瑛子「お母さんじゃないわね～、これは」

琵琶子「彼女の手作りお弁当なのかな……」

椎子「ズバリ、愛妻弁当だったりして！ っ、えっ、何、どうしたの!?!」

浮橋「いただきます……」

人目をはばからず、浮橋は泣きながら、むしゃむしゃ、ご飯を頬張っている……。

× × ×

五時限目 。

休み時間 。

浮橋「……………」

午前中あれだけうるさかった浮橋が窓の外を眺め、すっかり静かになってしまった。

六時限目 。

帰りのホームルームが終わり 。

譲葉「案内しようか？」

浮橋「今日は帰るよ……」

急いで、下校する。

浮橋は走る 。

立ち止まって、振り返る　　。

そして、また走り出す　　。

二日目　　。

浮橋「ういーす！」

クラスメイト「「……………」」

浮橋「どうしたー？ みんな、元気ないなー？」

いつもの軽い調子を取り戻した浮橋はヘラヘラと半笑いを浮かべて、着席する。しかし、その目は赤く、腫れぼったい。

三時限目と四時限目の間の休み時間　　。

浮橋「……ごちそうさまでした」

今日は自分の席で一人、早弁を食べ終えた。ニコニコ笑って、嬉しそうだ。

瑛子「あーん、気になる気になるう～」

琵琶子「またハートマークだったのかな……」

椎子「あんたたち、いっしょにご飯なさいよ！」

松田・竹田・梅田「「無理、無理、無理ーっ!!」」

お弁当の中身を確認したいけど、こっちから近づいてまで、ちょっかいだせず……。

昼休み　　。

廊下　　。

浮橋「クソ田舎にある、ただのしょーもない学校じゃねえか！ ははっ」

教室でおとなしくしているのも苦しくなってきたのか、威勢よく、大声で悪態を吐く。

浮橋「……いてえな」

男子生徒「ご、ごめんなさーい！」

肩が当たったので軽く挨拶したら、逃げられた。周りにはいる生徒たちも視線を逸らし、見て見ぬフリして、やり過ごされる。そちらに回りこんで、イチャモンつけてみたり。

浮橋「あんだよ!？」

女子生徒「な、なんでもありませーん！」

歩いてるだけで、顔を見て、ギョッとされる。判創膏は全て外した。カサブタだらけだが、青タンは治りつつある。そんな威嚇しているつもりはない。ただ、浮橋は目立つ。

浮橋「俺の相手をしてくれるようなヤツが、ホントにいるのかよ……」

廊下のわざわざ真ん中を闊歩するような浮橋を避け、端々に寄って行き交う生徒たち。見渡す限り、ほぼ髪の毛は黒色。たまに栗色。金髪はいない。軽くウェーブがかかっていたとしても、だいたい天パっぽい。長髪の男子はいない。男女共にメガネ率、高し。

浮橋「なんと、お行儀のよろしい、お坊ちゃんお嬢ちゃんの集まりだことで」

同じ世界で暮らす同年代の高校生なのに、自分からは最も縁遠い存在かもしれない。

浮橋「どうせアツタマいいんだろー、お前ら。将来の夢は、医者？ 弁護士？」

松田「僕たち、そんな偏差値、高くないから」

竹田「普通だよ、普通」

梅田「僕は、頭いいイコール医者か、弁護士って発想が怖いよ……」

浮橋「おんどりゃナメとんのか、わーれーっ！」

松田・竹田・梅田「「痛い、痛い、痛いーっ!!」」

クラスメイトたちは謙遜して、そんなことを言ってたけど、宿題をする、予習をしてくる、授業中は黒板の内容をノートに書き写す、誰も余計な私語を挟まない、教室から勝手に出て行かない。みんな、真面目。隣のヤツくらいである、ずっと眠っているのは。

浮橋「……」

浮橋が自主退学させられた前の学校は、大いに荒れていたけれど、それこそ彼にとって「普通」だった。窓にベニヤ板が張られていたり、煙草の吸殻が落ちていたり。みんな、バカだったけど、楽しかった。高校生なのにアルファベットを全部、書けない生徒が半分以上いて（中学校で習う）、九九が全部言えない生徒も、ざらにいた（小学校で習う）。

浮橋（俺は焦らなければ、大丈夫だけだな……）

分数の割り算ができない、どっこいどっこの浮橋が今は一種の一芸、スポーツ推薦みたいな特別枠の転校生として、窓には窓ガラス、花壇には花が咲き、非常ボタンは非常時しか押さない、空き缶はアルミとスチールを別々にリサイクル、ガムは紙に包んで捨てるのがエチケット、そんな、いい学校に通わせてもらっている。有り難いと感謝しないと。

組員「それはともかく、ホンマでっか、若頭？」

若頭が頷く。

組員「よかったなあー、ウ〜キ〜ハ〜シィ〜！」（グリ）

浮橋「……ど、どーゆーことですか？」

組員「わかりやすく言うと、わたらの業界における甲子園みたいなもんだ」

意味がわからない。世の中には、そんな全国大会があるのだろうか？ 初めて聞く。

組員「なんせ、若頭も昔、転校生だったんだぞ。それはもう伝説的な強さでな。

即戦力でドラフト一位指名も競合して、親分が籤引きで引き当てたのよ」

踏みつけられていた足が、どかさされた。口の中は苦く、滴り流れる血が目にも染みる。怖くて、ずっと見れなかった若頭の顔。土下座する浮橋は、ゆっくりと頭を上げていく。

若頭「……俺のこたあ、どうでもいい。浮橋、てめえの落とし前は、てめえがつけな」

浮橋「あ、兄貴い……」

詫びて済む問題じゃない。殺されても文句が言えないのに、チャンスを貰ったのだ。

若頭「死ぬ気で戦ってこい」

浮橋「は、はい！」

勝って、勝って、勝って、勝ち続ければ、そこで初めて、望む明日がやってくる……。

帰りのホームルームが終わり。

浮橋「ほな、さいならー、また明日ー」

譲葉「……あっ！」

今日も急いで、下校する。

階段を駆け降り、混雑する昇降口付近。

たむろう沢山の生徒たちの間を縫うように、軽やかに。

浮橋は走る。

立ち止まって、振り返る。

正門から出て行こうとする前に、一旦、校舎を見やった。

そして、また走りだす。

浮橋（頑張らなくっちゃ!!）

途中、何度も立ち止まり、シャドーボクシングしながら。

三日目。

放課後。

夕暮れの校舎。

薄暗い階段を登っていく浮橋。

屋上へ出る鉄扉に書かれている警告文『関係者以外立入禁止』。

浮橋「……………」

扉の向こう側を見やって、浮橋は手をかざし、目を細めた。夕日が差し込んでくる。

逆光の屋上に立つ人影、二人　　。

譲葉「お待ちしてました、浮橋京介さん」

一人は、いかにも面倒見よさそうな、実は陰険メガネの学級委員、譲葉　　。

葛巻「……………」

そして、いつものようにやる気なさげにガシガシと頭をかいている葛巻　　。

校内放送『もうすぐ下校の時間です。校内に残っている生徒は、急いで帰りましょう』

夕闇が迫る校舎に物悲しいトロイメライの曲が流れて　　。

葛巻「……………」

浮橋「……………」

転校生を標的にした決闘ゲームを前にして、目線逸らさず、睨み合う二人　　。

×　　　×　　　×

高級マンション　　。

インターフォン『ちーす！ 浮橋ッス』

しばらくして、チャイムが鳴る　　。

玄関へ出向き、チェーン、ロックを外し、ドアを開けた。隙間から、覗く。

両手に荷物を抱えた男の子が一人、立っている。名前とはもなく、顔は知っている。

浮橋「どもども、浮橋ッス」

そうそう、浮橋ナントカくん。まだ子供のようなあどけなさも残る金髪の舎弟くんだ。

雪菜「……入って」

浮橋「いいんすか？　　お邪魔しまーす」

ドアを大きく開き、「いいわよ」と返事をする前に、もう靴を脱ぎにかかっている。

浮橋「あ、あの一、今日は兄貴が、なんか突然、急に大事な用ができたとのことで、

大変、申し訳ないのですが、俺が代理として、兄貴の言付けを預かってきました」

要はドタキャンされた。で、代わりにやってきたのが、最近、お気に入りの弟分……。

雪菜「いいわよ、電話あったから」

かなり文句も言った。怒れたらよかったんだろうけど、嫌味しか出てこなかった。

雪菜「それでもサプライズを期待してしまうのよね……」

実は、本人登場のパターン？ 遅れて、本人登場のパターン？ まだ少し期待してる。

浮橋「すみません。俺なんかでは兄貴の代わりにはならないとは思いますが、

今日は精一杯、祝わせていただきますので、よろしくお祈いします、姐御」

雪菜「……姐御は、やめて」

浮橋「兄貴のいい人だから、姐御だと思うんだけど……。じゃあ、姐《あね》さん？」

雪菜「雪菜《ゆきな》でいいわよ」

浮橋「それじゃ、すみません、雪菜さん」

雪菜「座って」

リビングのテーブルには、すでに二人分のご馳走が用意してあった。本来なら浮橋の兄貴分である若頭が食べるはずだった雪菜の手料理。オシャレで本格的なディナーが並ぶ。

浮橋「ヤバいッスね」

雪菜「ヤバい？」

浮橋「すごいッスね！」

雪菜「ふふっ、ありがとう」

微笑む美人とお食事。代役を任された浮橋は、すでに得した気持ちでいっぱいだった。

雪菜「そう言えば、私、修司《しゅうじ》さん以外の男性を自宅に招き入れるのは初めてなんだよ」

浮橋「それは光栄ッス」

雪菜「男性てゆーか、まだ可愛い男の子？」

浮橋「えへへ、可愛いは勘弁してください」

雪菜「えーと、そのケーキは後からでもいいかな？」

浮橋「あっ、ケーキ！」

浮橋が買ってきたケーキ。クリームたっぷり、シンプルなイチゴのホールケーキだ。

浮橋「食べるのは後回しでも、約束事だけは先にやっておきましょう」

ケーキを箱から出し、長めのキャンドル二本と細いキャンドルを七本、刺していく。

雪菜「それも、そうね」

浮橋が火を灯していく。雪菜が部屋の照明を暗くする。淡い炎の光が、二人を包む。

浮橋「　　せーの！」

雪菜「私も歌うの!？」

いっしょにバースデーソングを歌い、雪菜はキャンドルを吹き消す。二息、三息。

浮橋「おめでとう！ 雪菜さん、誕生日、おめでとうございます！」

浮橋は力いっぱい拍手した。ただ一人しかいない盛り上げ役としての務めである。

雪菜「ありがとう」

浮橋「これは、兄貴からのプレゼントです」

雪菜「まあ、嬉しい」

改めて袋の中身を確認するまでもない。ブランド物のバッグや財布など一式だろう。

雪菜「浮橋くんからは？」

浮橋「すみません、何も用意してませんでした」

雪菜「まっ、突然だったもんね……」

照明を明るくする。顔見知り程度で、二人っきりのバースデーパーティーである。不本意なはずなのに、そんな気分じゃない。意外と気まずくならないことが不思議だった。

浮橋「また次の機会があれば、必ず！」

雪菜「来年？ 来年は修司さんが来てほしいわ」

浮橋「ですよー、ははっ」

雪菜「さあ、食べて、食べて！」

浮橋「いただきます!!」

ひとつ食べるごとに「美味しいッス!」「美味しいッス!」と連呼しながら、浮橋だけが賑やかな食事の後、雪菜はバースデーケーキを切り分ける。3 / 4 が浮橋の担当である。

雪菜「さあ、食べて、食べて！」

浮橋「……ありがとうございます」

雪菜「それにしても、いっぱい食べてくれたわねー」

浮橋「ごちそうさまでした。もう、おなかいっぱいっぴいっぴいです」

ケーキがあるから、お代わりしなかった。でも、半分以上、ケーキは残してしまった。

浮橋「これ以上は、ちょっち無理っばいッス」

雪菜「なら、私が食べようかな！ 食べられるわ、甘いものなら、いくらでも!!」

雪菜が、むしゃむしゃとケーキを食らう。浮橋より食べてないか？ ヤケ食いだ。

浮橋「あの一、雪菜さん、無理しないでくださいね」

雪菜「無理って何!? あ一、美味しい美味しい。ケーキ、超美味しー」

それから、三十分後

浮橋「それじゃ、もうそろそろ……」

雪菜「えーっ、まだいいでしょ？ お願い」

腰を浮かせかけた浮橋を、まったく食休み中の雪菜は慌てて引き止める。

浮橋「もう遅いので、そろそろ帰らないと……」

雪菜「いいの！ だって、十二時までが、私の誕生日なんだから」

壁時計を見る。まだ三時間近くある。浮橋は、仕方ないな、と思う。

浮橋「はあ、わかりました……」

雪菜「なんか、本格的に楽しくなってきたわ！」

さらに、一時間半後

雪菜「だいたいズルイのよ、修司さんってばねえー、聞いてるー？ 浮橋くーん!?!」

浮橋「はいはい、もちろん」

浮橋は、雪菜の晩酌に付き合わされていた。高そうな洋酒を、がぶがぶ呑んでいる。

雪菜「あははははっ、修司さんのお酒だけどー、全部、呑んじゃえ、呑んじゃえー！」

酔っぱらいが絡んでくる。浮橋は、お暇《いとま》するタイミングを完全に逸してしまった。

浮橋「すみません、まだ未成年でして、ちょっと……」

雪菜「あにおー、未成年ってキャラか、お前！」

金髪パーマ頭を、いい子いい子されるが、力加減がバカになってるため、かなり痛い。

浮橋「す、すみません、苦手なんすよ」

雪菜「その年で得意なヤツの方が問題よん。男はね、呑んで、吐いて、強くなるの」

グラスに、なみなみと注がれる。とりあえず、口だけでも付けないと収まらないか？

浮橋「はぁ……」

雪菜「……呑んでもいいが、絶対、吐くなーっ!!」

ここが自分の部屋だと気付いたようだ。綺麗な絨毯にぶちまけられたら最悪である。

雪菜「浮橋くんって、今、いくつ？」

浮橋「十七ッス」

雪菜「ショック、十も違うんだ……」

丸々ほとんど一人で食べて、余りはスポンジの一部しか残ってないパースデーケーキに刺してたキャンドルの本数が示す通り、雪菜は九歳。　　じゃなくって、二十七歳。

浮橋「でも、今年で十八です」

年下は年下ながら、大したことのないようで、気になる一年差なのかもしれない。

雪菜「なら、ココノツかー……」

浮橋「椰子の実は、ココナツッ」

雪菜は、ぐいっとグラスを傾ける。

雪菜「つまんない」

浮橋「すみません」

余計なことを言うと、ますますハイペースで呑み続けてしまいそうだ。

雪菜「浮橋くんは、早く大人になりたいタイプ？　私は、もう年は取りたくないな……」

浮橋「……はぁ」

なるべく聞き役を務め、しゃべらせないと。

浮橋「そうっすねー、俺は早く兄貴のように、一人前の男として認められたいです」

雪菜「浮橋くんは、修司さんみたいになりたいの？」

浮橋「はい、もちろん！」

「怪獣モチロン!!」と続けようと思ったが、そこは自制した。

雪菜「そう。……私は、あんまり、なってほしくないな」

より俯き加減、ふらふらと揺れる頭が身体ごと沈んでいく。長い髪の毛が顔を覆う。

浮橋「えっ、どうしてですか？」

雪菜「わからない？」

また、ぐいっとグラスを傾けた。

雪菜「げほっ、げほっ」

むせる姿を見て、遅ればせながら、限界を感じ取った浮橋は、酒瓶を取り上げる。

浮橋「お酒は、そろそろ」

雪菜「……………」

雪菜の目が据わっている。

雪菜「いつ？」

浮橋「はい？」

雪菜「誕生日って、一人一人違う、一年に一日だけ誰もが持ってる特別な日じゃない？」

浮橋「はい……」

雪菜「今日は私。そんな一日の終わり、多くの人から祝ってもらっても嬉しいけど、
やっぱり、私は、特別な一人と特別な時間、特別な夜を過ごしたい……」

雪菜「前から約束して、待ってて、部屋を綺麗に掃除して、待ってて、
何、着ようかななんて悩んで、待ってて、お化粧して、待ってて、
料理を作って、待ってて、すっごく楽しみに待ってて、待ってて、……待ってて」

雪菜「お前、誰だ？ 誰だよ、お前？ なんで、お前なんだ!？」

浮橋「……………」

雪菜「こんなの、楽しくない。ホントは全然、楽しくないよ！」

雪菜「どれだけ我慢すれば、私の順番になるんだろう？」

雪菜「私にとって、あの人は一番。でも、私は、あの人の何番目？」

雪菜「今日は、今日だけは私の日のはずなのに……」

雪菜「どうして？ 急用って何よ!? ああ、奥さんが憎い。子供たちが憎い。
私の大事な一日に限って、家庭を選ぶあの人が憎い!! いつも、いつも」

雪菜「帰って！ もう帰ってよ！ こんなのヤダ！ もう私を一人にして！」

そして、時計の長針が十二を差そうとしていた。

酔いつぶれた雪菜が、ソファで寝そべっている。

浮橋「よいしょっと！」

帰るにしろ、どうしようか迷っていた浮橋は、思い切って雪菜を抱きかかえる。

雪菜「ん……」

浮橋「あんなところで眠っていると、風邪、引きますよ」

雪菜「……まだいたの？」

お姫さまだっこされて、寝室に運ばれていく。ふわふわしてる。ふらふらしてる。

浮橋「ええ、約束ですから」

雪菜「そう、シンデレラの魔法は解けちゃったんだ……」

頭が痛い、だいたいの記憶は残っている。ハッピーバースデーには程遠かった。

雪菜「ごめんなさい、メチャクチャ、言っちゃったね。浮橋くんは悪くないのに」

浮橋「こちらこそ、すみません。空気読めなくて、厚かましく居残ってしまった」

頃合いを見計らって、引き止められても、すぐに帰るべきだったのかもしれない。

雪菜「ふふっ、もう帰らなくてもいいよ」

せっかくの誕生日だったのに、だからこそ、誰もいない部屋で一人になると寂しい気持ちに囚われてしまうことがわかってて、誰でもよくて甘えてしまったら、この醜態だ。

浮橋「いや、流石に、そーゆーわけにはいかんでしょ？」

雪菜「修司さんに怒られる？」

浮橋「ぶっ殺されますね、確実に」

若さゆえの勢いであったとしても、浮橋に、ここで押し倒すほどの勇氣はない。

雪菜「だったら、嬉しいな」

笑顔が戻ってる。あんな辛そうに怒りぶちまける泣き顔は、二度と見たくなかった。

浮橋「まだ、もうちょっと先なんすよ」

雪菜「……何が？」

浮橋「俺の誕生日」

浮橋「今度は、俺のために、俺の特別な一日を、雪菜さんが祝ってください」

雪菜「約束できる？」

浮橋「はい」

雪菜「楽しみに、待ってて」

浮橋「待ってます」

× × ×

讓葉「ルールを説明します」

葛巻・浮橋「「……………」」

讓葉「お二人には、これから簡単なゲーム、度胸試しで勝負してもらいます」

讓葉「まずは、あちらのフェンスの上に上がっていただきます」

手すりと呼ぶには結構な高さのフェンスが、屋上には張り巡らされている。バレーボールのネットくらい、二メートルちょっと。手前なら落ちても、さして問題ないが、向こう側だと三階建ての校舎をまっ逆さまに転落してしまう。死にはしないとと思うが、危険だ。

讓葉「落ちれば負け。落とせば勝ち。とても、わかりやすいルールのゲームです」

讓葉「リタイア、ギブアップ宣言を今なら認めます。どうしますか？ 浮橋さん」

校内放送『下校の時間を過ぎました。さよなら、さよなら、さようなら』

校内から生徒の姿が見えなくなり、真っ暗闇に包まれていく校舎。

浮橋「……今日の昼休み、放課後に来るよう、屋上に呼びだしておいて」

わかっちゃいたけど、

浮橋「こーゆーことかよ？ 無理矢理、迫るのは勘弁してもらいたいな」

讓葉「不手際は、お詫びします」

形だけですが、

讓葉「合意の上じゃないと、一応、万が一の場合もあるので、困るんですよね」

浮橋「合意、合意。ははっ、確かにお互い合意の上じゃなきゃ、イケねえ」

精一杯、悪い顔を作って、

浮橋「もちろん、そのつもりさ。最初から、ヤッてもいいって話だったし」

讓葉「それでは、問題はないと言うことで」

さらっと受け流す。

葛巻「……………」

浮橋「なあ、あんたも転校生なんだろう？」

葛巻「……元・転校生だ」

浮橋「だったら、わかるんじゃないか？ 俺の立場だったり、俺の気持ちだよ」

本気じゃないかもしれない。

からかわれているのかもしれない。

どんな優しさも通じないときがある。

怒らせて、嫉妬させて、愛情を感じたいのだと思うことが、多々ある。

浮橋「これが、男のケジメ、ってやつさ」

雪菜「……そう、男の人は、いつも勝手」

お互い、どんなつもりかわかってて、弱みを握る。ずるく立ち回る。同情を誘う。

が、そんな駆け引き、クソ食らえ!! 勝つ。とにかく勝って、全てはそれからだ。

浮橋「俺はさ、今、最高に幸せなんだ」

ポケットをまさぐる。

浮橋「この幸せが、もっと、もっと長く続けばいいと思っている」

浮橋「だから」

メリケンサックを両の拳に装着した。

浮橋「転校生狩り、お前を絶対に倒さなきゃいけない！」

葛巻「同じ武器を！」

讓葉「わかった」

普通に好きだってこと。

態度で伝わらないなら、何度でも愛していることを言葉にしよう。

こんな自分と文句言いながらも、いっしょにいてくれることが本当に嬉しい。

浮橋「いってきます！」

雪菜「行ってらっしゃい」

大事にしたい、こんな穏やかな日々を。

それを大切に思える、この気持ちを

讓葉「決闘の時間です！」

讓葉「右か、左か、選んでください、浮橋さん」

途中、どこにも足を掛けることもできず、容易には乗り越えることができないフェンスに立てかけられた二本の梯子。片方へ進んでいく浮橋が、ふと様子を窺うと、梯子に足をかける手前のところで葛巻が上履きを脱ぎ、揃えている。裸足になって戦うようだ。

浮橋「そうだな……」

足場は予想以上に細く、ゴム底の上履きでは滑ってしまうからだろう。靴下も脱ごうとしたが、はめたメリケンサックが邪魔で脱ぎにくい！ かなり、もたもたしてしまった。

讓葉「ちなみに、相打ちの両者転落は先にフェンスの上に戻ってきた方が勝者です。

共に復帰できず、ゲーム続行が不可能と判断した場合のみ、引き分けとします」

浮橋（集中、集中……。目の前の敵に、集中しよう……）

上がってみたら、思ったより高く感じる。よくあることだ。足が竦む。陰囊が縮む。

浮橋（ゆっくり深呼吸して……。平常心だ……。落ち着け、俺……）

葛巻「……………」

両拳を眼の高さまで上げるファイティングポーズ。半身になっても両足を一直線に前後するため、下半身が不自然な構えだ。浮橋も遅れて同じファイティングポーズを取った。

浮橋「……………」

讓葉「レディ、ファイト！」

浮橋「行くぞっ!!」

ファイターらしく、浮橋が前に出る。葛巻も応じる。ずんずん、間合いを縮めていく。

葛巻「……………」

浮橋（どうする？）

共にメリケンサックを装着しているため、ブロックができない一撃必殺のデスマッチ。ある程度、近づいてしまえば、手が届くギリギリの間合いを計りつつ、様子見の態勢。

浮橋（どうくる？）

葛巻「……………」

葛巻も待ち。一旦、浮橋も待つ。

浮橋「……………」

浮橋（先手必勝！）

そんな膠着状態は長く続かず、前へ突っこむ。その勢いに乗せて、軽く拳を出す。

浮橋「シュッ！」

葛巻「……………」

かわされた。サイドステップはできない。上半身だけでなく、ステップでバックする。

浮橋「シュ　　」

さらに前へ踏みこもうとすると、そのタイミングに合わせて、葛巻がパンチを放つ。

浮橋「危ね、危　　」

今度は浮橋が引く。

葛巻「おら」

引いた間合いを詰めてくる葛巻　　。

葛巻「おら」

激しいラッシュを、屈み、反らし、揺すり、避け、時に迎え撃つ浮橋。

葛巻「おらーっ！」

カチン、ガチン、金属音が鳴り響く。かち合うメリケンサック。

浮橋「……な、なかなか、やるじゃねえか？」

葛巻「ふっ、お前こそ」

さらに、ある程度の間合いを維持しつつ、お互い、パンチの応酬をやりあった。

浮橋「ぜえぜえ……」

葛巻「大丈夫か？」

打ち合いの結果、拳が腕まで、じんじんと痺れる。ガードが下がらないように必死に構える。時間は無制限。ボクシングのようなラウンドごとの休憩がない。呼吸が苦しい。

葛巻「一休みしようか？」

浮橋「結構、コケッコー」

葛巻「よーし、本気出すぞ、ここからっ!!」

浮橋「……へっ!？」

葛巻「おらおら、おらーっ!!」

浮橋の動きが速くなる、腕が伸びてくるような錯覚、紙一重でかわせない、かするだけでもダメージは大きい。足場を全く気にしていない葛巻と、そうでない浮橋との差か？

浮橋「がっ、まだまだーっ！」

テクニックなら負けない。スピードの変化にも慣れる。最悪、相打ち狙いのクロスカウンターを食らわす。葛巻を外へ押しだし、自分を内側へ落ちるように仕向けるのだ。

浮橋「さぁ、かかってこい!!」

葛巻「行くぞっ！」

浮橋「見えたっ！」

葛巻「どらぁーっ!!」

浮橋「ぐはっ……」

一瞬、大振りするかのようなフェイントに騙されそうになり、それには気付き、見切ったつもりが、予期せぬところからの攻撃が浮橋のスネを打った。ローキックである。

譲葉「ボクサーはボクサーでも、キックボクサーだったりして」

片足でもフェンス上、バランス感覚にブレなく、葛巻は、さらなる蹴りを放った。
譲葉「なんて解説しているうちに」

浮橋「あっ……」

構えをほどき、無防備になった浮橋の両腕を葛巻がつかむ。

葛巻「うっ」

浮橋「くそ」

腕の自由を奪われ、浮橋の懐に潜りこんでくる葛巻を殴れなくなる。

葛巻「しゃーっ!!」

浮橋「おげればぁ……」

引き寄せられ、強烈な膝蹴りを腹に食らった。

激痛に意識が遠退く……。

崩れ落ちる。

浮橋は、落ちていく。

浮橋「ごめん、雪菜」

浮橋「俺、ダメだった……」

ドスン!!

× × ×

ボロっちいアパート。

汚い台所。

コンロの前に立つ、エプロン姿の女性。

雪菜「ふん、ふん、ふふーん」

鍋をかき混ぜながら、カレーのいい匂いに鼻歌がもれる。そんな笑顔あふれる自分に驚きたい。惚れて付きまとっていた、妻子ある男性に捨てられて、手に入れたもの全て奪われた結果、こんな何もないところに連れてこられてしまった。悲しくて泣いてよかったのに、何故か、涙はこぼれず、ただ代わりに泣いてくれる優しい人がいっしょだった。

もしかすると、これは、これで楽しいかもしれない。

雪菜「今日は、ちょっと遅いな……」

毎日、急いで帰ってきてくれる。お弁当も、ペロりとたいらげてくれる。何でも「美味しいッス!」「美味しいッス!」と連呼してくれる。他にないのか? ろくなもん食べてこなかったのだろう、味覚に関するボキャブラリーは残念ながら貧困だ。結局、子供っぽいから、カレーライスだったり、ハンバーグとかオムライスなんかが大好きなのだ。パスタはミートソースだし。卵焼きも砂糖いっぱいがいいらしい。カレーも甘めのポークカレーだ。ちなみに、こーゆーときの定番とされる肉ジャガはピンとこなかったらしい。でも、朝、お味噌汁を出すとムチャクチャ喜んでくれた。パンより、ご飯の人だった。いっしょに暮らすことで、日々、新鮮な気持ちに包まれる。彼に惹かれてく自分を実感する。

もしかすると、これは、これで幸せなのかもしれない。

雪菜「ホントに、どうしたのかな? 京介《きょうすけ》くん……」

すでに晩ごはんの準備は万端である。食わずに待ってるのは、カレーの場合、なかなか辛い状況。雪菜は何度も時計を確認する。珍しく、否、初めてだ。かなり遅い。

雪菜「……えっ?」

六畳一間のポロアパートで待つことしかできない雪菜の携帯電話《ケータイ》が鳴る。持っていないから、浮橋ではない。それは、久しぶりの着メロ。昔は待ち遠しかった愉快的なメロディ。

雪菜「……」

涙が滲む。

雪菜「……約束したのに」

かくて、楽しくも幸せな時間は終わろうとしていた。

もう二度と浮橋とは会えないかもしれない……。

To be continued...

食パンをくわえた少女「遅刻、遅刻～う！」

食パンをくわえた少女「転校初日に寝坊するなんて、かなりヤバイよねえー」

食パンをくわえた少女「まさか目覚まし時計が鳴らないなんて、故障かしら？
それとも、私が眠っている間に小人さんが止めたとか？
そもそも、ちゃんとセットしていたかどうかも怪しいんだけど」

食パンをくわえた美少女「 うわったっ!!」

どっしーん

食パンをくわえた美少女「あいたたたたたた……」

食パンをくわえた美少女「きゃっ、どこ見てんのよ！ このH、スケベ、変態!!」

食パンをくわえた美少女「てゆーか、ぶつかっておいて、謝罪もなし？」

食パンをくわえた美少女「もちろん、私だって少しは悪いんだけど、急いでたし」

食パンをくわえた美少女「……わかったわよ、チャラよ、チャラ！ 見られた私の方が、
ぜーったい、損しているはずなのに腹立たしいわ全く」

食パンをくわえた美少女「お願いだから、忘れてちょうだい。脳ミソえぐっても、
あなたの記憶から私を消去して、二度と思いださないでね」

しばらくして、食パンを食べ終えた美少女「はぁ、本気で遅刻しちゃおうかな……」

× × ×

朝のホームルーム 。

クラスメイト「「……………」」

教師「えー、わかっちゃいると思うが、うちのクラスに、また転校生だ」

その日、教室に現れた転校生は、ぱっと見、可愛い女子だった。まず外見で男子生徒の関心を引きだした上に、転校生が黒板に自分の名前を書こうとして、クラスメイト全員に、さらなるインパクトを与えることに成功した。チョーク片手に硬直している後ろ姿。

転校生「……………」

しばし逡巡した挙句、一文字、消して書き直した名前は、『くろばら有紗《ありさ》』。

転校生「く、黒薔薇有紗《くろばら ありさ》です」

漢字を書けないんだったら、全部、ひらがなにすればよかったか？ 恥ずかしさを隠すかのように、慌てて、ぺこりと頭を下げる。そうして一呼吸置いて、見渡す余裕ができ、初めて教室の中が、なんか異様に硬い空気であることに気付く。ますます緊張してきた。

有紗「……あ、あのー」

続けて、自己PR的なことを言わないといけないのだろう。前の学校では、どんな感じだったとか、新しい学校ではこうしたいとか、ここが転校生デビュー最初の難関である。

有紗「よろしくお願いします……」

何も言えなかったーっ!! チキンです。こんなはずじゃなかったのに。残念そうな目で見ないでください。ちゃんとできる子ですから、『薔薇』が書けなかっただけで、いや、ニュアンスなら、それっぽいもの書けますよ。殴り書きで『薔』な『薇』みたいなもの。

教師「えー、何かあれば、学級委員の譲葉《ゆずりは》に訊くように」

譲葉「はい」

いかにも委員長っぽい真面目そうなメガネの男子生徒が、姿勢よく手を上げている。

教師「それから、えー、確か席は、葛巻《くずまき》の隣が空いているんだっとな」

教室を見渡せば、窓側、やや後方、一番のポジションの席が空いている。隣りは、葛巻「……………」

ボロボロの学生服を着た男子生徒が机に突っ伏していて、眠っているようだった。

譲葉「はい、ここです」

学級委員の譲葉玲人《ゆずりは れいじ》が、誰もいない自分の前の席を指し示した。

譲葉「困ったこと、わからないことがあれば、何でも訊いてくれ」

有紗「ありがとうございます」

カバンを置き、自分の席に座り、深呼吸してから、有紗は恐る恐る隣りを見やる。

有紗「……………」

可愛らしく小首を傾げ、少し悩んだ後、立ち上がり、隣りの眠れる男子を指差す。

有紗「あーっ! そのボロボロ制服は、今朝のスカート覗き男じゃないのーっ!!」

葛巻「……………」

ピクリと肩が動いたような気がするが、そのまま何事もなかったかのようにスルー。

有紗「シ、シカトしないでよーっ!」

面倒くさげにようやく葛巻大地《くずまき だいち》が、のっそり頭を上げる。寝ぼけ眼で有紗を注視する。

葛巻「……………」

譲葉「何かあったの?」

有紗「今朝、この男と、ぶつかったのよ。そのとき……………」

寝起きてことを差し引いても、なんて覇気のない間抜け顔。髪の毛はボサボサで寝癖なのか、そういう無造作ヘアにも限度がある髪型なのか、掻きむしるとフケが落ちる。

葛巻「ああ、生の食パンをくわえたまま、よくしゃべる変な女が……」

有紗「誰が変な女よ、変な？」

葛巻「お前」

有紗「あんたの方が、よっぽど変な男じゃない！」

有紗「てゆーか、私のこと、まだ覚えてるのね。もう忘れなさい!!」

葛巻「どっちだよ……」

知らんぷりをするのが正解だったようである。再び、突っ伏して閉鎖モードへ戻った。

譲葉「やれやれ、今回は楽しくなりそうだな」

松田「あの子、すごいね！」

竹田「食パンをくわえて、ぶつかってくる転校生なんて、ホントにいるんだな……」

梅田「いや、いくら何でもお約束すぎるんじゃないか？」

瑛子「女子の転校生は久しぶりだよねえ～」

琵琶子「うん、珍しいよね……」

椎子「あんなに可愛いのに、大丈夫かな？」

女子の転校生が相手では、いつもと勝手が違うのか、静かな教室がざわめく。

教師「えー、それじゃあ、みんな、仲良くするように」

気の弱そうな担任が、ぶつぶつ呟くと寂しげな表情で去っていく。

教師「……短い付き合いになるかもしれませんが」

一時限目 。

休み時間 。

二時限目 。

休み時間 。

三時限目 。

休み時間 。

四時限目 。

そして、さして何事もなく昼休み 。

讓葉「昼だぞー、メシー」

葛巻「……………」

讓葉は午前中、ずっと眠りこけていた葛巻の肩を揺する。

讓葉「黒薔薇《くろばら》さんは、どうします？」

有紗「……………」

讓葉「黒薔薇さん？」

有紗「……………」

讓葉「黒薔薇さん！」

有紗「……えっ、私!？」

後ろから声を掛けられても、なかなか気付かない有紗。肩に手を置かれて、振り向く。

有紗「ああ、もうお昼休みなのか……。なんだか、ぼんやりしちゃってね」

「ぼんやり」と称したが、授業中も休み時間も、ずっと張り詰めて緊張しているようであった。周囲を警戒している。慣れない初日、転校生ならば仕方ないかもしれないが。

讓葉「弁当を持ってきてるならいいですけど、購買部の方でパンとか、オニギリとか、

お茶とかジュースを売ってるから、買いに行くなら、いっしょにどうですか？」

四時限目が終わった直後、チャイムが鳴り響く中、教師を押しよける勢いで我先にと多くの男子生徒たちが教室から飛び出ていった。給食かつ学食のない多くの高校がそうであるように、購買部では数少ない人気惣菜パンの争奪戦が繰り広げられているのだろう。

讓葉「案内しますよ」

有紗「お弁当を用意してきたから、ごめんなさい」

讓葉「そうですか、では 」

一応、葛巻も誘ってみようとしたものの、適当に振るう片手で断られ、やがて讓葉は一人で教室を出ていった。

有紗「……………」

有紗は自分の席で、おとなしく弁当を食べ始める。

葛巻「……………」

その隣りで、机に俯く葛巻が眠り続けている。

クラスメイト「「……………」」

教室に残り、食事中のクラスメイトもまた沈黙を守った。

五時限目 。

休み時間 。

六時限目 。

帰りのホームルーム　。

そして、放課後　。

譲葉「どこか見たいところとかあれば、これから案内するけど」

有紗「いいよ、いいよ。何度も誘っていただいて悪いけど、ごめんなさい」

再び譲葉からの案内の申し出を断り、有紗は一人、校内をうろつく　。

有紗「……普通の学校みたいだけど、やっぱ、どこか違うんだよね？」

誰からも、すごく注目を浴びていることは間違いないのに、遠巻きに観察されているようで。視線を合わせてくれないから、気持ち悪い。好意的に解釈すれば、高嶺の花？

有紗「でも、それは自分が転校生だから、そう見えてしまうのかな……」

体育館　。

有紗「……」

どうしても気になる部活の練習風景を見学する有紗の熱いまなざし　。

部員「「……」」

見つめられている視線に気付いてしまうと、そわそわ浮き足立つ部員たち　。

一部練習を中止すると何人かで集まって、話し合いを始めた。少し口論があって（「無視しなさい」「無理です」「帰ってもらえないかな？」「そんなことで大会で演技ができるの!？」「それとこれとは話しが違いますよ」「私、死にたくない……」「そんな子には見えないけど」）、やがて押しだされるようにして三年生の女子が一人、近づいてくる。

部長「あなた、体操に興味あるの？」

有紗「はい。前の学校でやりましたから」

部長「そう。あなた、やっぱり転校生なのね……」

有紗「すみません、私、すごい怖がられてますね」

部長「ごめんなさい。みんな、疑心暗鬼になってるのよ」

有紗「疑心暗鬼？」

部長「今まで怖い転校生がいっぱいやってきたから。私は、あなたは違うと思うけど」

有紗「それは、どうでしょうか　」

部長「えっ!？」

突然、有紗は走りだし、ジャンプ。制服のまま、スカートと膝を抱えて前方回転する。

着地はマットの上、ごろりと転がってから、立ち上がる。両手を上げて、決めポーズ。

部長「……でも、転校生なのか。惜しい、惜しいわー」

ただ一人の拍手を浴びて、挨拶代わりに演技を披露した有紗は怪訝な気持ちになる。

有紗「ひょっとして、転校生は部活できないんですか？」

部長「まっ、色々、あるじゃない。大会に出るためのレギュレーション、とか……」

学校同士で有力な選手の過度な引き抜きを抑制するため、ペナルティじゃないけど、ある一定期間は公式大会には出場できないルールは確かにある。にしたって、留学生じゃないんだから、転校生は。正式にクラブに所属することすら難しいなんて信じられない。

部員「「……………」」

しかし、周囲を見渡せば、よくわかった。冷たく突き刺す目が並んでいるさまにゾッとする。有紗は全く歓迎されていないことを痛感した。これが、この学校の転校生なのだ。

有紗（この学校じゃ、みんなといっしょに楽しく体操もさせてもらえないのか……）

クラスの中では、委員長の厚意をあしらって、隣の席の男子とケンカしたくらい。有紗のイメージでは、もっと転校生はチャホヤしてもらえるもんだと思ってた。甘かった。

有紗（……これから、うまくやってく自信ないなー）

こうして、転校初日が終わった。

× × ×

二日目。

朝。

階段の踊り場。

瑛子「黒薔薇さん、おはよう。早いねえ〜」

有紗「……うわっ！ え、えっと？」

瑛子「私、瑛子《えいこ》。こっちは」

琵琶子「琵琶子《びいこ》です……」

椎子「椎子《しいこ》よ。同じクラスの」

有紗「お、おはよう」

向こうから声をかけてきてくれるなんて、昨日の顛末を思えば、考えもしてなかった。

瑛子「黒薔薇さん、大丈夫？」

有紗「えっ、大丈夫って、まだ私は何とも大丈夫デスヨ」

ドキドキして、声が裏返る。だいたい「黒薔薇さん」ってのが呼ばれ慣れていない。

瑛子「転校生狩りよ、転校生狩り。どうせ知ってるんでしょ？」

有紗「うん、まあ、一応……」

この高校へ転校するに当たって、それなりの、いや、かなり詳細なレクチャーは受けてきた。かねてから、転校生ばかりを狙う「転校生狩り」が暗躍しているとのこと。これまで何十人もの、もしかすると、もっと多くの転校生が襲われ、病院送りになっている。

有紗「まだ二日目だから」

瑛子「危ないのは、三日目だもんね……」

四日目、学校に現れなくなり、そのまま再び転校のお知らせが繰り返されてきた。入院先だったり、転校先は担任の教師ですら聞かされていない。ゆえに何人かは殺されているんじゃないか？ と疑われている。実際、行方不明になった転校生も少なくないそうだ。

椎子「久しぶりの女の子だもん、心配しちゃうよ」

比率からすれば、男子転校生十人以上に対して、女子転校生は一人以下くらいである。

椎子「それに黒薔薇さん、名前ほどワルそうな人に見えないし」

有紗「あはは、ありがと……」

有紗「……すう～、はあ～」

一旦、ドアの前で深呼吸してから、有紗は教室に入る。空元気も元気の種類だ。

有紗「おはよう！」

クラスメイト「「……………」」

すでに教室の中にいたクラスメイトたちの視線が集まる。有紗は仕方ないにしても、たまたま転校生といっしょに登校してきた三人組にも無言のプレッシャーが突き刺さる。

瑛子・瑛子・椎子「「……………」」

有紗「あぁっ、ごめんなさい。私がいっしょだと迷惑じゃないかな？」

本来なら、「おっはよ～」「おはようございます……」「おはよっ！」「おはよう、おはよう、おはよう!!」なんて、朝の挨拶がやりとりされていたかもしれないのに。

瑛子「迷惑って、何が？」

瑛子「そんなことで謝られたくありません……」

椎子「文句あるんだったら、直接、言えばいいんじゃないかな！」

クラスメイト「「……………」」

視線を反らす。申し訳なさそうな顔。そうか、悪いことをやっている意識はあるんだ。

有紗「私、みんなから歓迎されていないみたいだけど、消えた方がいい？」

瑛子「そんなことないって～」

琵琶子「そうだよ……」

有紗「ありがとう」

いい人たちだ。教室の中に、ようやく居場所ができたかもしれない。

有紗「私、転校生だけど、転校生狩りに負けたくないんだ」

椎子「よく言った！」

有紗の肩を強く叩く。

椎子「うちのクラス、みんなで黒薔薇さんを応援してあげられないかな？」

松田「それは難しいんじゃないかな？」

竹田「不干涉が鉄則……」

梅田「とばっちりには、ごめんだし」

瑛子「せ～の」

瑛子・琵琶子・椎子「「何もできないと決め付けているっ!!」」

松田「……どうしたんだろう、突然？」

竹田「全く、わからん……」

梅田「何か女の子同士、変なところで結託したみたいだな」

瑛子「せ～の」

瑛子・琵琶子・椎子「「私たちにだって、できることがあるはずだよっ!!」」

瑛子「ちょっと前までは、うちのクラスも、こんなじゃなかったよね？」

琵琶子「もうちょっと自由で闊達な雰囲気があった……、と思います！」

椎子「すっごく強くて面白い番長がいてね、すっごく楽しかったんだよ」

有紗「……そう、なんだ」

椎子「でも、転校しちゃった」

有紗「……………」

椎子「たった一人、入れ替わるだけでクラスの雰囲気、すっかり変わっちゃったんだ」

有紗「一人……」

ガラッ。教室のドアが開く。

譲葉「おはよう！ ……どうした、みんな？」

葛巻「……………」

朝のホームルームが始まる直前、譲葉と葛巻の二人が現れた。すると、皆が皆、全員、

瑛子・琵琶子・椎子「……………」

松田・竹田・梅田「……………」

クラスメイト「……………」

黙ってしまった。休み時間であっても騒がしくしてはいけないルールが発動したのだ。

午前の授業中。

手紙『くろばらサンへ』

四角く折られたメモ用紙が有紗の元に飛んでくる。開くとメッセージが書かれていた。

手紙『ごめんなさい。クラスの総意として、みんながみんなは協力できないみたいです』

早速、どこからか、何らかの圧力がかったようである。数十人の人間を、ひとつの大部屋に一まとめにしたからって、ひとつのグループになるわけがなく、それぞれ個々に多様な力関係を構築している。転校生に優しくして取りこもうとする勢力があれば（これは、うがった見方かもしれない）、排除しようとする抵抗勢力もあり、おそらく多数派は、事なかれ主義で賛成も反対もせず、傍観しているのだろう。過去、何度も痛い目にあってきた経験が、そうさせる。あるいは、今度こそ違うんじゃないか、と新しい風に期待する。

手紙『でも、私たちは、くろばらサンの味方です。信じてください。A・B・C』

有紗（ありがとう、瑛子さん、琵琶子さん、椎子さん！）

先生が黒板に向かって板書中、有紗は教室を見渡して、三人と小さく手を振り合う。

葛巻「……………」

それから、丁寧に折り畳んでメモ用紙をポケットにしまうと、隣りを見やった。

有紗（せっかく隣り同士の席なのに、転校生によくあるお約束の机を寄せ合っの、

「教科書、見せてよ？」作戦を執行するにも、こいつ、ずっと寝てるし……）

黒《、》薔《、》薇《、》有紗はツンデレ設定なので、上手に相手と衝突していかないと連鎖的なイベントが発生しづらい。腹は括っても、なかなか一方的に突っつかれない。恥ずかしいし。

このクラスで浮いているのは、転校生の有紗を除けば、隣の葛巻である。仲間ハズレやイジメられっ子が出している負のオーラに近いが、彼は孤独、弧高、壁を作っている。

有紗（おとなしい羊の群れに野生の一匹狼が混ざっているみたいな感じ？）

見ていると、無性に苛立つ。だったら、見なければいいのに、意識してしまう。そんなに気になるんだったら、正面から、ぶつかっていかないと！ 昨日の朝のように……。

有紗（よーし、行くぞ！）

そう、自ら動かなければ、こっちの都合よろしくは、事は何も始まらないのだ。

昼休み　。

有紗「今日も昼食抜きって、あんた、ダイエットでもしてるの？」

有紗「お弁当を作りすぎたから、いっしょに、ごはん食べよう！」

上から命令する感じで言い放つ。有無を言わせず、隣の机に自分の机を寄せる。

葛巻「……………」

有紗「いいよね!？」

急いで、弁当の包みを開けていく。三段重ねのお重で、手作りは茶飯と出汁巻玉子などで、おかずの大半は冷凍食品をレンジでチンしまくったとは言え、ゆえにハズレなし！

讓葉「羨ましいなー」

葛巻「……しくない」

不機嫌そうに小声で反論すると、葛巻は立ち去ろうとする。

葛巻「構うな、俺に……」

讓葉「おーい、どこに行くんだー」

有紗「何よ、あいつ……」

これだけ用意してきたんだから、絶対、うまく餌付けできると思ったのに……。

二人が出て行って、息が詰まるような教室の空気が一変する。雰囲気や和らぐ。

瑛子「あんなの、ほっといていいから～」

琵琶子「私たちと食べましょう……」

椎子「すげえ美味そうだな！」

有紗「……食べる？」

松田・竹田・梅田「僕も、僕もっ!!」

校舎、屋上　　。

讓葉「実は、あの転校生の背後関係がイマイチわからなくて、探りを入れてるんだ。
どんな組織がバックに付いているか、名前にしたって偽装の可能性が強い。
どこまで知っているのか、素直に吐いてくれると楽なんだが……」

讓葉「もちろん、ちゃんとチェックしとかないと、決闘ゲームのことを何も知らない、
ホントに本当の全然関係ない、ただの転校生が紛れこんでいるかもしれないからな。
……いつぞやのお前のように」

葛巻「……」

昼食後　　。

わいわいと賑やかに、クラスメイトたちと色々な雑談で盛り上がる教室　　。

瑛子「前の学校では、どんな感じだったの？」

琵琶子「黒薔薇さんって、本名なのかしら……」

椎子「答えたくなければ答えなくてもいいよ」

三人の笑顔が迫る。少し、怖い。いい人たちだと思うけど……。

有紗「わ、私は　　」

×　　×　　×

急な転校が決まり、そのことを仲の良い限られた親友数人にのみ話したただけなのに、お別れ会は三度、開かれた。理由が理由だけに、本当は、できれば消えるように転校してしまいたかったのに……。おしゃべりでお節介な友達のイキな計らいだったと今では思う。

最初は、体操部の仲間と　　。

次は、クラスメイトのみんなと　　。

そして、最後は、わずかな親友と　　。

お別れ会では、こんなときを選んで、こんなときだからか？　呼びだされては、

男子体操部員「気付いてた？　俺が君のこと、好きだったってこと……」

男子同級生「気持ちを伝えておかないと、一生、後悔しそうだから。好きでした！」

その他大勢「「僕も、僕もっ!!」」

体操部の仲間、クラスメイト、その他大勢も便乗しての告白大会になってしまった。

有紗「ありがとう。でも、ごめんなさい！」

強がる男の意地「「わかってたけどなっ!!」」

有紗に片想いしてたけど、全く相手にされてなかった男友達「「おろろーん……」」

フラれた者同士が慰め合っている。これで、お別れなんだから、もう二度と顔を合わさないと思えばこそその告白であり、近寄る男どもをフリまくって、何様!?　な有紗だって、さほど気まずくならない。どうか願わくば、いい思い出に昇華してくれますように。

演劇部先輩「小林《こばやし》がいなくなると、寂しくなるなー」

有紗「先輩……」

こんな状況になっても告白できなかった有紗はチキンです。だって、メールや電話だけじゃ、寂しいから。どうせ直接、会えなくなる遠距離恋愛は長続きしないって、これだと両想いになることが大前提みたいだけれど。もしも先輩の方から告白してくれれば吝かではなかったのに、結局、差しさわりのない感じで終わってしまった。なーんだ……。

有紗（わかっていたけどなっ!!　おろろーん……）

とは言え、有紗は、いわゆる恋愛そのものについて懐疑的にならざるを得なくなっていたため、告白大会のノリは嬉しくはあったものの、笑顔の裏、本音のところでは迷惑でもあった。自分は、その流れにはノリたくなかった。つまりは言い訳ばかりよ、心の中は。

しかし、三度のお別れ会を通じて、自分が自分が思う以上に周囲から好ましい存在として受け入れられている事実を見せ付けられ、涙こそ流さなかったが、うっかり貰い泣きしそうになり、瞳を潤ませるには充分だった。これからのことを考えて、必死に我慢する。

親友「私たちといっしょに泣けばいいのに……」

有紗「泣けないよ。私は、もう泣けないんだ」

親友「意地っ張りなんだから、コバちゃんは」

有紗「とっても感謝しているから。これまで色々とお世話になりました。

さよなら！ みんな、大好き！ ありがとう！」

有紗は引越す理由を、あまり人には知られたくなかった。どこが噂の出所か、調べたくないが、両親の離婚らしいことは何故か、お別れ会に参加した全員が知っていた。もちろん、それ問い詰めてくるような奴はいなかった。察して、転校する有紗を見送った。

寄せ書きの色紙『頑張れっ！ 負けるなっ、小林有紗《こばやし ありさ》!!』

いつからだろうか？ 自分の両親が、ちょっとおかしいな、と思ったのは。夫婦仲がよろしくないことは子供心に気付いていた。かすがいになるべく、いい子を演じたり、わざと迷惑かけたり、努力した時期もあったが、諦めた。親子三人で話し合っ、納得した。

ママ「私たち、この度、晴れて離婚することになりました」

パパ「ごめんな、有紗……」

ママ「有紗ちゃん、悪いけど、ママとパパ、どちらかを選んでちょうだい」

パパ「この家に残るか、出ていくか、お前のしたい方に任せるよ……」

有紗（どっちかにしろって!? 選べるかよ、そんなの……。任せられても困るわ!）

突然のことじゃなかった。前々から相談されてたし、結果がどうなるにしろ話し合いのため、弁護士や裁判所の調停が入ることも想定していた。すったもんだがあっ、ようやく離婚が成立したのだ。なのに、いざ決断の瞬間、チキンハートが言葉を詰まらせる。

今の高校に通い続けることを選択するなら、父親を選べばいい。ただし、辛気臭い父と二人っきりで、ずっといっしょに暮らすなんて考えられない。自分のことは自分でするにしても、炊事・洗濯・掃除・家事全般の全て、父の面倒を見なければいけないだろう。

有紗（パパには悪いけど、ママの代わりなんて役目、私、ごめんだわ……）

だったら、母親についていくか？ 母には、ずっと不倫していた再婚相手となる男性がいて、かなり悩ましい存在だった。何度か外食の席で会ったことがある。高校生である有紗のタイプじゃない、どこに母が惚れたのか理解できない、お金持ちそうなオッサンだった。そんな人といっしょに暮らして、お父さんと呼ぶには抵抗がある。バツイチ同士ながら幸い、向こうに連れ子はいなくて、別れた奥さん側に二人の息子さんがいるらしく、この場合も、有紗のお兄さんになるのか、他人なのか、よくわからない。とにかく厄介だ。

ママ「この家にパパを一人、残していくなんて心配だわー」

ウソつけ！ わざとらしい言い草。ついてくるなよってことを言いたいのだろう。悪い人じゃないけど、基本的には優しい母ではあるのだが、勝手気ままさには辟易している。

パパ「有紗あ～……」

対して、震える声、すがるような情けない父の顔。己が娘にも捨てられそうな恐怖がよく伝わってくる。頼りないこと、甚だしい。悪い人じゃないし、優しい父ではあるが。

有紗（それでも、ハッキリさせなきゃいけない。自分のことだもの！）

将来のことを考えて、少し早まったとは言え、親離れ・子離れの時期が来たのだ。

有紗「ママ、パパ。私、一人暮らしするわ」

ママ「そう、有紗は一人暮らしがしたいのね？」

パパ「ひ、一人暮らしって、そんな、まだ……」

ママ「いいえ、数年後を考えたら、全然不思議じゃないし、それもいいかもしれないわ。

お金のことなら心配しないで。ええ、ナントカしましょう！」

ナントカするのは、あんたじゃねえけどな。

パパ「……と、父さんは反対だ！」

お前に反対されても、胸が痛まないんだよ。

有紗「私、黒薔薇会のお世話になろうと思うの」

パパ「黒薔薇会か……」

ママ「なら、安心ね!!」

ママ「ママは応援する。愛する娘だもの。有紗は、有紗の信じる道を生きなさい！」

パパ「ここは有紗の家だ。だから、いつでも、この家に帰ってきてもいいからな？」

有紗（さようなら、ママ、パパ……）

家を出ると玄関前、有紗を迎えに来ていた黒服の老紳士と美人秘書が待っていた。

ママ・パパ「「有紗のこと、何卒、よろしく願います!!」」

いかめしく黒光りするゴツイ車に乗る。運転手が回りこんで、ドアの開け閉めしてくれた。老紳士のついでであっても恐縮する。いつからか後部座席もシートベルトを閉めなくてはいけなくなり、「窮屈だ」と隣の老紳士がぼやき、助手席の秘書に窘められる。

秘書「万が一、事故ったとき、生き残るための安全策なんですから」

振動なく、気が付くと、いつの間にか車は走りだしていた。有紗は窓の外を眺める。
有紗（もう、この街とはお別れなんだ……）

流れていく街並み。生まれ育ち、思い出のいっぱい詰まった、見慣れた風景が滲む。

有紗「これで、よかったのかな？」

秘書「私たちには、わかりません」

有紗の両親は、すっかり彼らのことを信頼していたが（高校生である娘の身柄を預けてしまうほど）、果たして、そこまで信じていいのか、有紗本人は疑念を捨てきれない。

老紳士「もうしばらくすれば、ハッキリする。幸せにはタイムラグがあるからの……」

老紳士と美人秘書。本名は知らない。最初に会ったときから、おかしな人たちだった。

老紳士「わしのことは、翁《おきな》と呼んでください。おーほほほっ！」

秘書「私は、……秘書の人でいいです」

手渡された黒いパンフレットには、とんでもない感じの活動内容が書かれていた。

秘書「私たちは黒薔薇会と言いまして、皆さまの幸せをサポートする団体です」

有紗「『全世界幸福追求慈善団体・黒薔薇会』……」

翁「我々の力をもちいれば、父上と母上、お二人をすみやかに離婚させることも、逆に現状維持で離婚させないことも可能です」

有紗「そんなことできるんですか!？」

秘書「多少、強引な手段を取るケースもございますが……」

彼らは弁護士事務所の仲介で、裁判所の方から派遣されてきたと言っていた。こじれた関係を整理するため、間に入って、双方の言い分を聞き、最大限の配慮を示しながら、問題をひとつひとつ処理していく。これがセオリーで、しかし、やり方の全てではない。

有紗「そんなにうまくいくのかしら？」

秘書「有紗さまは、いかがしたいと考えていますか？」

有紗「母と父にとって最善の決着であれば、私は、どうだっていいです」

秘書「失礼ながら、我々が幸せにしたいと考えているのは、有紗さまなのです」

有紗「……えっ？」

翁「父上、母上の言い分の中に共通する想いは、娘さんの将来を心配なさっている」

有紗「ホントに？」

翁「あなたの幸せを確保してしまえば、問題の大半はクリアされたも同然です」

秘書「有紗さまの将来の夢は？ 具体的に、なりたい職業などありますか？」

有紗「……いいえ、特には」

高校生くらいになると悲しいかな、現実が見えてきて、夢を語るにも堅実さが必須だ。

秘書「おそらく進学なされると思いますが、まだ少し猶予がありますからね」

有紗「はい……」

秘書「ならば、そうですね」

有紗「……」

有紗は、ただ両親が離婚する・しないでモメる不安定な日々から抜けだしたかった。

そのことを察した黒薔薇会から、新たな選択肢を提案された。

自立への道。

一人暮らしできるように、そのお手伝いをさせてほしい。

秘書「有紗さま。勝手ながら、すでに私どもは色々と調べさせていただきました。

家庭環境はもちろん、学校では過去からの成績の推移、それに交友関係。

クラブは中学から体操部。それに高校では演劇部にも所属されていたそうで」

有紗「演劇部は助っ人で、文化祭のときとか……」

翁「我々は、そんなあなたを、求めている、うってつけの人材だと判断しました」

秘書「おめでとうございます、有紗さま」

翁「これからは、わしらと共に世界を幸せにしていかないか？」

有紗「世界の幸せ云々はともかくとして……」

黒薔薇会の申し出を受諾し、有紗は入会契約書にサインした。まだ未成年だから、これまでの保護者、両親の同意を取りつけ、合わせて彼らが有紗の正式な代理人《エージェント》となった。

秘書「さて、有紗さまには、かなり特殊な高校へ潜入捜査してもらいます」

有紗「潜入捜査？」

秘書「難しく考えることはありません。有紗さまは、転校生になっていただきます。

ただの転校生ではなく、特別な意味での転校生ですが、心配ありません。

こちら側から万全のサポートをお約束しますし、ちなみに、これが資料です」

有紗「具体的に何をすれば、いいの？」

秘書「学校の中で起こったことを随時、レポートにして私たちに報告してくれれば」

有紗「こんなにも詳しい資料があるのに？」

秘書「現場からの正しい最新情報には、これ以上の価値があるんですよ」

有紗「……わかりました。私、転校生になります」

翁「おーほほほっ、打倒・転校生狩り!! 可愛すぎる転校生・黒薔薇有紗の誕生だ！」

有紗（……ホ、ホントに、これで、よかったのかな？）

× × ×

三日目 。

放課後 。

夕暮れの校舎 。

薄暗い階段を登っていく有紗 。

屋上へ出る鉄扉に書かれている警告文『関係者以外立入禁止』 。

有紗「……まぶしっ」

扉の向こう側を見やって、有紗は手をかざし、目を細めた。夕日が差し込んでくる。

逆光の屋上に立つ人影、二人 。

譲葉「お待ちしてました、黒薔薇？ 有紗さん」

一人は、いかにも面倒見よさそうな、実は陰険メガネの学級委員、譲葉 。

葛巻「……」

そして、いつものようにやる気なさげにガシガシと頭をかいている葛巻 。

校内放送『もうすぐ下校の時間です。校内に残っている生徒は、急いで帰りましょう』

夕闇が迫る校舎に物悲しいトロイメライの曲が流れて 。

葛巻「……」

有紗「……」

転校生を標的にした決闘ゲームを前にして、視線逸らさず、睨み合う二人 。

讓葉「てゆーか、えっ!? 何、そのカッコ？」

有紗「ビックリした？ まっ、あんたにビックリされたかったわけじゃないけど」
制服ではなく、有紗はレオタード姿で屋上に現れた。

葛巻「……………」

さあ、恥ずかしがれ！ 照れる！ こっちは着慣れたユニフォーム、自然体だ。

葛巻「恥ずかしくないのか？」

有紗「どうってことないわ！」

無論、恥ずかしいんだけど。胸とか、デリケートなところだけをジロジロ見られて、

有紗「み、見るなっ!!」

葛巻「どっちだよ……」

讓葉「ルールを説明します」

葛巻・有紗「……………」

讓葉「お二人には、これから簡単なゲーム、度胸試しで勝負してもらいます」

讓葉「まずは、あちらのフェンスの上に上がっていただきます」

手すりと呼ぶには結構な高さのフェンスが、屋上には張り巡らされている。段違い平行棒の高い方くらい、二メートルちょっと。手前なら落ちても、さして問題ないが、向こう側は三階建ての校舎をまっ逆さまに転落してしまう。頭から激突したら、確実に死ぬる。

讓葉「落ちれば負け。落とせば勝ち。とても、わかりやすいルールのゲームです」

讓葉「リタイア、ギブアップ宣言を今なら認めます。どうしますか？ 黒薔薇さん」

有紗「……えっ、あ、はい」

葛巻「だから、どっちだよ……」

校内放送『下校の時間を過ぎました。さよなら、さよなら、さようなら』

校内から生徒の姿が見えなくなり、真っ暗闇に包まれていく校舎。

讓葉「決闘の時間です！」

讓葉「右か、左か、選んでください、黒薔薇の有紗さん」

途中、どこにも足を掛けることもできず、容易には乗り越えることができないフェンスに立てかけられた二本の梯子。臆することなく、有紗は一方を選び、軽やかに駆け上がっていく。葛巻は梯子に足をかける手前のところで上履きを脱ぎ、裸足になってから登る。

有紗（……思ったより、大丈夫そうね）

有紗は足場を確認する。体操の平均台の幅が十センチだ。それよりも細い。しかも、倍近い高さがある。内側にしただってマットの敷かれていないコンクリートに飛び降りたくはない。とりあえず歩行はもちろん、ターン、ジャンプ、片足立ちで決めポーズ、倒立や側転、回転に支障はなさそうだ。体操選手として選ばれたからには見せ場に使いたい。

有紗（意外と大会で演技するときより、ビビってないかもしれないな……）

どっちかと言えば、有紗は緊張しいで本番に弱いチキンハートであることを自覚している。しかも直接、目の前の敵と対決する試合は体操にはない。自分の演技に集中して、習得した規定の技の中から、より高度な技を連続でよどみなく、しっかり美しく決める。演技終了後、いくつかの基準で審査員が採点する。競技としてやってきたスタイルが違う。

譲葉「ちなみに、相打ちの両者転落は先にフェンスの上に戻ってきた方が勝者です。

共に復帰できず、ゲーム続行が不可能と判断した場合のみ、引き分けとします」

有紗（とにかく、落とされないようにしないと！）

マトモにやりあっては、万が一にも勝てる見込みがない状況下、ここまでは、おおむね黒薔薇会の用意したシナリオ通りにできたと思う。古典的なお約束を被せたり、ツンデレ設定、レオタードも色仕掛けで籠絡するためだ。火の通ってない生肉、腐った玉子、下割り入りのご飯をふるまう計画もあったが、これは察知されたのか、うまくいかなかった。

譲葉「レディ、ファイト！」

葛巻「……」

ゆっくりと向かってくる。

有紗「あなたは、何のために戦ってるの？」

後ろ歩きで下がりながら、有紗は葛巻に話しかけた。

葛巻「……」

少し、歩く速度を上げる。駆け足になる。

有紗「自分のため？ 大切な人のため？ 将来の夢のため？ お金のため？

それとも、どうしようもなくなって救いを求めたの？ その全部？」

葛巻「……」

急加速、走りだす。

有紗「学校は、楽しい？ 今が、幸せ？」

有紗は、ターンして逃げだした。

有紗「私は新しい学校で、新しい友達もできたよ」

葛巻「……………」

無言で追いかける。

有紗「きゃっ！ 離して!!」

フェンスの角で減速して、曲がろうとするところを、葛巻が捕まえる。

有紗「あぶっ、危ないよ……」

葛巻「……………」

寝ぼけたことを言って、抱きついてこようとする。しょせん、その程度の覚悟か？ まっすぐ見据える瞳に、葛巻は激しい怒りを覚える。言葉による揺さぶりの次は、女の武器であり、最終兵器の涙を浮かべている。マジかもしれないし、嘘泣きかもしれない。一見、怖がっているように見える。どうせ、できっこないとナメられているようにも見える。

讓葉（相手は初めての女子だぞ。転校生狩り、いつものようにやれるのか？）

有紗「外はやめて……。お願いだから、中にして……」

相手が可愛いだけの女の子だから不愉快なのではない。こんなふざけた戦い、葛巻だけじゃなく、今まで真剣に戦ってきた転校生も含めて、まとめて侮辱されたように感じる。

葛巻「……………」

有紗「……………」

葛巻「……………」

有紗「……………」

葛巻「……………」

落ちる。

言葉なく、落ちていく。

校舎から突き落とされた自分が信じられなかった。

ドスン!!

× × ×

校舎、屋上 。

讓葉「転校生に原則として四日目は、ない」

讓葉「転校生狩りに勝ち、次の転校生狩りにならなければ、再び転校させられる」

讓葉「しかし、本当のところは、誰も知らない……」

決闘ゲームの敗者は、どこへ消えていくのだろう。

そもそも転校生が、こんなバカバカしい決闘ゲームに挑む事情を知らない。知りたくない。知ったところで手加減するわけにもいかない。

戻れる場所があれば、たぶん、そこへ帰っていくのであろう。帰れなくても、負けたなら仕方あるまい。例え逃げだせなかったとしても、また逃げだせばいいだけの話だ。再び転校生になれなくても、きっと、どこかで他にやりようがあるはずだから、……と思う。

彼らの、彼女の身を案じる。おそらく、それは勝者にのみ許された特権である。

讓葉「結局、小林有紗に戻ったんだってさ」

よかったな、と言ってやるほどの義理はないけれど。ならば、まだ幸せな方だろう。

しかし、

葛巻（本当のところは、誰も知らない……、なんだよな……）

讓葉の言っていることが、本当に真実か確かめるべきがない。

どんなに勝ち続けていても、一回、負ければ、そこで一巻の終わり。

葛巻（明日は、我が身か……）

転校生狩り・葛巻大地は、空を見上げる。

吹き抜ける風が髪の毛を、そよぐ。

To be continued...

あとがき 1

あとがき

どもども、はじめまして！ TVアニメ『少女革命ウテナ』が大好きだった竹出闕道です。

改行！ 改行!! 改行!!!

台詞！ 台詞!! 台詞!!!

勢いよく楽しんで書いたので、楽しんで読んでもらえれば幸いです。

これから続きを書いてシリーズ化、どんどん量産するつもりでいるんですが、・・・すでに、ここ数ヶ月、何も書いてねえや！

『転校生狩り II』はもちろん、『転校生狩り III』『転校生狩り IV』『転校生狩り V』『転校生狩り 0』は構想しかありません。

困ったもんです。

以下は、裏話的な各話解説。ちょっとネタバレを含んでいるかもしれないので(?) 改頁します。

あとがき 2

v s . 烏丸渉 50枚

何も知らず最初に読んだとき、クライマックスで、・・・あれ? と思ってくれたらOK。だいたいが転校生の視点で語りながら、最後は負けて退場する。つまり、『転校生狩り』は敗者の物語だ。主人公は、一応、転校生狩り・葛巻大地ではあるものの。

v s . 叢雲疾風 48枚

唯一、決闘後、転校生の所在が確定するエピローグがある話。決め事として、その後を書かないわけじゃない。むしろ、続きを書きたくって仕方がないくらいである。バラバラのエピソードが収束するのって気持ちいいでしょ。・・・ゴメン、無理っばい。

v s . 浮橋京介 59枚

プロローグ・起・承・転・結・エピローグの基本フォーマットで転に位置する回想シーンで色々、書くつもりが雪菜さんの誕生日だけになってしまった。高校中退のボクサー崩れが、いかに若頭たちと出会い、拾われたのか、そーゆー話も書きたかったね・・・。

v s . 黒薔薇有紗 60枚

可愛いだけの女の子です。転校生の女子比率は作中に触れられているよりは、ずっと高めで登場させる予定である。執筆当時(2009年年末~翌年1月)、一番、ノリノリで書いていて、決闘シーンからエピローグの流れも、いい感じ。自画自賛しておく。

長編小説1000枚理論の実証まで、残り783枚。まだまだ、先は長い。

それでは、最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。

いつか、また!

TAKEDE-NOVEL : <http://takede.infoseek.ne.jp/>

TAKEDE-NOVELS : <http://takede.seesaa.net/>

Copyright(C) 2010 TAKEDE Tokimichi All Rights Reserved.